

## 潜伏命題名詞句再考：N-意味理論の分析の批判的検討と 指示参照ファイル理論による分析\*

山泉 実 大阪大学

キーワード：潜伏命題名詞句、指示参照ファイル理論、N-意味理論

### 1. はじめに：名詞句意味論・語用論研究のパラダイムとしての N-意味理論

本稿は、潜伏命題名詞句 (concealed proposition noun phrase, CPNP) と言われる名詞句を事例として、2 つの名詞句意味論・語用論の理論の分析を比較対照し、CPNP を提起した N-意味理論 (西山 2003, 2013, 西山・西川 2018 他) の分析に対して、指示参照ファイル理論 (Reference File Theory、以下 RFT、山泉 2019、2020b, c, 2021, Yamaizumi 2019) の分析の優位性を主張する。その過程で、CPNP についての新事実の提示・分析も行う。以下、まずは 2 つの理論を紹介する (1 節, 2 節)。続いて、N-意味理論の CPNP の分析を紹介した後、批判的に検討し (3 節)、RFT の分析を示す (4 節)。

CPNP を分析した西山 (2013) の枠組み—近年「N-意味理論」(西山 2019a) と呼ばれている—は、西山 (2013) の著者らを中心に 1980 年代半ばから推し進められているもので、天野・三宅・大木の鼎談 (2019) で指摘される通り、近年日本において盛んな名詞句研究に大きな影響を与え続けている (詳細は上記文献参照)。分析概念として、変項名詞句、指示的名詞句、叙述名詞句、値名詞句といった名詞句の意味機能による分類や、飽和名詞・非飽和名詞、譲渡可能名詞・譲渡不可能名詞といった意味による名詞の分類などが特に広く知られている。これらの概念によって、複合的名詞句「NP の NP」、潜伏疑問文、各種コピュラ文、各種存在文等の言語表現が分析されている。N-意味理論では、語用論についても関連性理論 (スペルベル&ウィルソン 1995/1999 など) に立脚しながら、名詞句の自由拡充 (峯島 2013)、アドホック概念構築 (梶浦 2013) などが研究されている。潜伏命題名詞句を広く知らしめたのも N-意味理論である。

N-意味理論は、上で述べた様々な現象の分析に用いられるものという意味でのパラダイム—研究者集団の「成員によって共通して持たれる信念、価値、テクニックなどの全体的構成」(クーン 1970/1971: 198)—である。N-意味理論による通常科学的研究、「パズル解き」の典型例としては西山 (2020) が挙げられる。高度に専門化したこの研究が有力な学術誌に掲載されていることから、N-意味理論は、この名称こそ広く知られていないとしても、日本の言語学界において名詞句研究のパラダイムとして確立していると言えよう。

一般に、通常科学においてうまく処理できないことは変則事例 (anomaly) と言われ、パズル解きによって解決が目指される (クーン 1970/1971)。変則事例が蓄積し、パラダイムへの信頼がゆらぎ始めるとその科学は危機に陥る。初めは単なるパズルに見えていたものが、なかなか解決できずに蓄積してくると、次第にパラダイム修正の必要性が感じられるようになり、さらにこの状態が

続くと、徐々にパラダイム全体への信頼が揺らいでくる。CPNPはN-意味理論を危機に陥らせるそのような変則事例の1つと筆者は考えている（他の変則事例は山泉 2021、2019を参照）。

危機下においては、研究者を新たなコミットメントと科学の実践の基礎に導く異常科学が行われる（クーン 1970/1971: 7）。そこでは、「新しい基本からその分野を再建すること」が行われ、「その分野の最も基本的な理論的前提」の変更が試みられる（p. 96）。そのため、異常科学は哲学的考察を多分に含むこと（p. 100）が科学史に多く見出されている。そのような変更を伴う名詞句意味論・語用論の新たな枠組みとして提唱されているRFTの議論も同様に哲学的考察を多分に含む。

## 2. 指示参照ファイル理論：名詞句意味論・語用論研究の新パラダイム

RFTは、言語を可能にする心の仕組みを探るという心理主義（mentalism）の立場をN-意味理論やその属する生成文法、さらには認知言語学などと共有するものの、N-意味理論の技術的な修正にとどまらない別個の理論であるため、以下ではその背景から説明していく（理論の基盤の詳細については、山泉 2020b, 2020cを参照）。以下で述べること全てが、CPNPの議論に直接関係するわけではないものの、理論の全体像抜きには、RFTによるCPNPの分析を理解することは難しいため、直接関係しない部分にも言及することにする。

### 2.1. 指示参照ファイル理論の基盤：言語観・コミュニケーション観・認知観

人間が名詞句で対象を（語用論的に）指示するとき、言語使用者の心に対象に対応する心的表象があり、それが指示に使われた表現（の心的表象）と結びつくと考えられる。その際、対象に対応する心的表象がワーキングメモリに構築される◆<sup>1</sup>。指示参照ファイル（RF）はこの心的表象である。この用語はジャッケンドフ（2012/2019）に由来するが、RFTではその内実を精緻化して、名詞句の意味論・語用論に関わる現象の記述・説明に利用する。もっとも、RFは対象を視覚的に認識・追跡する際など、言語による指示以外にも使われていると考えられる認知的構築物であり、RFTの適用範囲も言語の分析にとどまらない。

RFTは、関連性理論に基づくスコット＝フィリップス（2015/2021）の言語進化のシナリオに基づき、言語の固有機能◆<sup>2</sup>（ミリカン 2004/2007）は話し手の思考のコード化ではなく、意図明示・推

---

◆1 [氏家] 一行上に「対象に対応する心的表象があり、」とあるので、表現と結びつく前からあるのだと理解したのですが、結びついた際にさらに構築されるということでしょうか。ワーキングメモリにコピーを作る感じですか？

[山泉] →人間が名詞句で対象を（語用論的に）指示するとき、言語使用者の心において対象に対応する心的表象が指示に使われた表現（の心的表象）と結びつくと考えられる。その際、ワーキングメモリに対象に対応する心的表象が構築される。

◆2 [氏家] 短くていいので説明がほしいと思いました。

[山泉] →註「あるものの固有機能というのは、そのものがある働きをすることによってそれが属する全休のシステムの存続に貢献し、それゆえそれ自身も選択されて存続することになったような働きのことである。」

「たとえば、心臓は体内に血液を循環させることによって生物の生存に貢献し、それゆえ自然選択によって選択され存続してきた。このとき、心臓は血液を循環させるという固有機能をもつと言われる。」訳者解説 p. 343

論コミュニケーション (ostensive-inferential communication、OIC) の強化であると考える。

OIC は、コードモデルでは適切に記述できないもので、発信者は自らの伝達意図・情報意図を受信者が推論できるように意図の証拠を提示し (意図明示)、受信者は、意図の証拠とコンテキストを元に、発信者の情報意図を推測する (推論)。コンテキストとは、発話場面、言語的文脈、世界などについての知識で、しかもコミュニケーションにおいて話し手・聞き手の心で利用された想定のことである。会話の相手が何を知っていて何を知らないかや、何をしようとしているかなどの想定も含む。コンテキストは、話し手が聞き手にとって適切な意図の証拠を作り上げる際にも重要な役割を演じる。OIC の機能は、話し手にとっては聞き手の心的状態を操作して環境を自分の都合よく改変すること、聞き手にとっては話し手の意図を読んで有益な情報を得ることである。会釈や含み笑いが示すように、OIC をするのに言語は必須ではない。OIC は、進化的には言語に先立って起こったと考えられる。発信者・受信者に共有された慣習的記号は OIC を強化することを機能として現れ、それが高度に体系化したのが現在の言語である。OIC の一種である言語コミュニケーションでは、発話が意図の主な証拠になる。この証拠として働くことを機能として言語は今の形になった。このような進化の結果、我々は、読心能力と 2 つの関連性原理 (スペルベル・ウィルソン 1995/1999) によって、言語コミュニケーションをしている。

RFT は以上を踏まえ、言語は OIC のために設計され、最適化されていると考える。<sup>1</sup> RFT ではさらに、名詞句の意味も OIC に最適化されたものだと考える。具体的にどう最適化されているかは様々な可能性があるものの、OIC において話し手は聞き手の心的状態を常に推測していることから、名詞句の意味とは話し手が推測した聞き手の心における RF (またはその一部) であり、名詞句の話し手の意味はそれに尽きると RFT は主張する。

以上の言語観に立つ RFT が、心理主義の探求対象である心のモデルにどのように位置付けられるのか<sup>◆3</sup>を次に述べる。RFT は、その源流となるジャッケンドフ (2002/2006) の言語の並列機構や関連性理論と同様、古典的計算主義の立場を取り、心を形式システム—「離散的なアイテムをその形式的な性質に言及した規則に従って操作することで計算を進めるシステム」(戸田山 2004: 30) —としてモデル化する。我々の体は、五感で得た外界からの刺激を心の各部門で操作してはインタフェースを介して別の部門に送るというやり方で処理をする。並列機構はこのような見方で人間の言語能力をモデル化したものであり、音韻部門、統語部門などが分節音や統語範疇といったそれぞれの要素をそれぞれの規則で組み合わせて、文の音韻構造や統語構造といった複合的な構造

<sup>1</sup> もっとも、スコット・フィリップスの進化のシナリオは、言語の究極要因の説明であるから、現代の言語のメカニズムについての至近要因の説明とは独立している。このシナリオが成り立たなくとも、現代の言語に関する RFT の主張が反証されるわけではない。

◆3 [氏家] RFT がどのように位置付けられるかというよりは RFT がどんな心のモデルを想定しているのかを説明していると解釈しました。

[山泉] →以上の言語観に立つ RFT が、心理主義の探求対象である心のどのようなモデルを想定し、そこにどのように位置付けられるのかを次に述べる。

体を作る。各部門の記号<sup>◆4</sup>は、統語部門以外のものも、統語論的構造を持つ。つまり、複合的な記号は原子的な記号を規則に従って組み合わせることによってでき、複合的記号の内容は構成要素とその組合わり方によって決まる。このような「統語論的性質によって駆動するエンジン」（pp. 31–32）として心を捉える見方は、意味を担う概念構造にも適用される。概念構造においては、記号が表象である点が他の計算システムとは異なる（p. 28）。概念構造においても、各部門の記号の意義・価値は、システムにおける他の記号との可能な区別によって保証され、その区別は究極的には脳状態の何らかの区別と相同であると考えられる。概念構造においてどのような区別を立てる必要があるのかを考えるにあたっては、心の計算論的理論の根底を成す主張である不変性の主張

（the Tenet of Constancy, Jackendoff 1992）が導き手になる。心理的な不変性<sup>◆5</sup>があるときはその不変性をコード化する心的表象が必要だとするものである（p. 5）。したがって、我々が認めることのできる種類の区別は空間構造なども含む広義の概念構造の理論においても区別できる必要がある（p. 8）。2.3 節で述べる指示参照ファイルのデータ構造はこのような考慮の元で考案された。

## 2.2. 言語のモデルにおける指示参照ファイル理論の位置付け

RFT は言語の並列機構の概念構造の理論である。並列した音韻部門・統語部門・概念部門のそれぞれは、要素を組み合わせる複合的な構造（音節、文、複合的概念構造など）を生成する。各部門はインタフェースで接し、各インタフェースの規則に従って構造体は対応付けられる。各部門の構造は層（tier）に分かれる。音韻構造は、韻律、音節、分節音などの層を成し、概念構造は記述層（≡語彙概念構造）、情報構造層、指示層に分かれる。RFT は、概念構造、特に最も研究の進んでいない指示層を精緻化する。

誤解を避けるために言っておくと、RFT は文法理論ではない。文法理論は、基本的に言語形式と

---

◆4[氏家] ちなみにこの記号ってどういう意味でしょうか。（形式と意味のペアという意味ではないですね？）

[山泉] ではないですね。心的な計算・操作の対象となる認知実体？

◆5[氏家] 重要なことなので、心理的な不変性があるとはどういうことなのか（あると言える基準）を説明する必要があります。

[山泉] 確認したところ、基準はなくて、同じと感じられるからにはそのカテゴリーがあるという程度のことしか言えなそう。

One fundamental tenet of the computational theory of mind is that whenever a psychological constancy exists, there must be a mental representation that encodes that constancy. Let me call this methodological assumption the Tenet of Constancy. If one does not accept this assumption, one is in effect regarding the psychological constancy as an unprincipled accident. In the present case, the form in which speech is perceived, regardless of the vagaries of the incoming acoustic signal, constitutes a set of constancies of the classical type, analogous to size, shape, and color constancies in visual perception. The sound p, for instance, is perceived as a p no matter in what position it occurs in the word, no matter in what position it occurs in the sentence, no matter who is speaking, no matter at what distance the sound is spoken. Thus the Tenet of Constancy leads to the conclusion that there is in the mind a level of representation—a form of mental information—that explicitly encodes the segmentation and discrimination of speech sounds. This level is what is traditionally called segmental phonology: a linear sequence of discrete speech sounds, concatenated into syllables, the syllables in turn concatenated into words.

意味の対応関係を記述したもので、どちらかを入力すればもう一方を出力する装置と捉えられる。しかし、RFT は、言語形式 $\longleftrightarrow$ RF の写像を目指したものではない。RFT は、言語使用を可能にする概念的資源の記述を第一に目指している。RFT を文法コードの理論と誤解されるよりは、メンタル・スペース理論（フォコニエ 1984/1996）のように、解釈の結果を記述するものだとまずは理解されたい。RFT が文法理論とは異なることは、並列機構における言語そのもの（language per se）—音韻部門、統語部門とそれらに関わるインタフェース—に概念部門が含まれていない（Culicover and Jackendoff 2005: 20）ということからも明らかである。概念構造は言語そのものに進化的に先立ち、言語はそれを伝達可能な形式にコード化することを機能として系統発生・個体発生するのである（同）。

次の点にも RFT が文法理論ではないことが現れている。RFT が RF として捉える名詞句の意味とは語用論的意味であって、その名詞句を構成する要素がコード化する意味を合成したものとは質的に異なる。そもそも、RF は概念構造における認知実体（cognitive entity）であるのに対して、名詞句を構成する語彙項目のコード化する意味は概念構造にあるものではない。並列機構において、語彙項目は音韻・統語・概念の局所的インタフェース規則として捉えられ、名詞句の表現にコード化された意味とは構成要素の課す概念構造へのインタフェース制約を合成したものということになる<sup>◆6</sup>。これ自体は概念構造ではなく、いわば鋳型である。意味論的意味（言語表現がコード化していて、文脈無しに得られる意味）と語用論的意味（コミュニケーションにおいて伝わる意味）はこのようにして理論的に峻別される。合成的意味論—複合的言語表現の各部分にコード化された意味と部分の組み合わせ方から言語表現全体の意味を合成する—は基本的に鋳型の研究であるから、鋳型によって制約される概念構造自体の研究である RFT とは別種のものである。

### 2.3. 指示参照ファイルのデータ構造

RF には 4 種類のデータが含まれる。RF に対応する言語表現以外の 4 種類のデータは全て「システムがしなくてはならない区別」（ジャッケンドフ 2002/2006: 365）という意味での非言語的な素性であり、「全ての認知現象における中心的な部分」<sup>◆7</sup>（p. 369）を成す。なお、RF は長期記憶ではなくワーキングメモリに構築される構造であるため、RF に対応する対象に関して持っている知識が全て含まれるわけではない（例えば、一人称代名詞が使われたとき、話し手自身に対応する RF に、自分についての膨大な知識が全て含まれると考えるのは不合理である）。また、RF の中身として表記される各部分の活性化の度合いは当然様々であるが、本稿ではその差は捨象している。RF のデータ構造の概観のために、次例の主語名詞句に対応する RF を示し、以下解説していく。(2)の下

◆6 [氏家] 語彙項目がどのような情報を持っていて、それが RF をどのように制約するのがわかる簡単な例があると嬉しいです。例えば「あの猫」だどうなりますか？

[山泉] The star について最後のページに書いてみました。

◆7 [氏家] よく意味がわからなかった。

[山泉] 迫力だけで実質的な意味はないのでトル？

線は発話によって加わる情報を表す。

- (1) 犯人は身長 2m の学生だ。
- (2) 「犯人」／@（位置付け）聞き手／ONT（存在論的範疇）人 [+ token]／ID x／  
CNT（内容特徴）〈x が洋梨を盗んだ犯人だ〉；〈x が学生だ〉；[身長：2m]

### 2.3.1. RF に対応する言語表現 「 」

概念構造の認知実体である RF は、言語使用以外でも用いられるため、対応する言語表現を持たないことがあるものの、名詞句の分析に RF を用いる本稿では、RF に対応する言語表現があり、「 」に入れて表記する。その中身は RF の一部ではなく、厳密には RF とインタフェースで結ばれる統語構造の NP とそれに対応する音韻構造を合わせたもので、他の表現でも同じ ID の RF に言及可能である。言語表現は話し手がどのような RF を意図しているかを聞き手が推測する手がかりとなるものの、聞き手は以下で述べられる RF の中身について、語用論的推論をする必要が常にある。上の例では、どの事件の犯人かは表現されておらず、聞き手は推論によって、洋梨を盗んだ犯人ということに補っている。

### 2.3.2. 内容特徴（CNT）：記述、特質-値、関係性-リンク先

内容特徴には、RF が対応する対象についての個別的な知識で、ワーキングメモリにおいて活性化しているものが含まれる。概念的な内容特徴は、(i) 記述、(ii) 特質-値 (attribute-value)、(iii) 関係性-リンク先に分けられる。本稿ではいずれも便宜上自然言語で表記する。

記述は〈x が学生だ〉や〈x が洋梨 b を盗んだ〉のような命題の形をしたものである（x と b は後述する RF の ID で、それによって RF を代表している）。自然言語の文法が許せば、RF の ID を主要部として◆8 関係節化することで、RF に対応しうる表現を作ることができる。例えば、〈x が洋梨 b を盗んだ〉という内容特徴が入っている RF（存在論的範疇 人）は、「洋梨を盗んだ人」に対応させることができる。

[特質:値] は x [身長:2m] のようなものである。RF が [特質:値] を含むことを示す際には、RF の ID を [ ] の前に付けて表記する。以下本稿で問題にする（体重）60kg のような [特質:値] の値は、他の独立した RF に対応しない。<sup>2</sup> 《父：太郎》のような、値が他の RF に対応するものは《関係性：リンク先》と呼び、[特質：値] と区別する。特質によってその値は様々で、[合否：{合

◆8 [氏家] 正確にいうと RF の存在論的範疇（人）に対応する名詞を主要部として関係節化？

[山泉] です

→RF の ID の部分を RD の存在論的範疇に対応する名詞にして、それを主要部として関係節化

<sup>2</sup> 特質とその値という概念はアドホックなものではなく、山泉（2020a）で「合否」「善悪」「男女」などの「並列名詞」とそれが主要部の名詞句の意味を捉えるためにも用いられている。独立した RF に対応しない特質値は、上山（2015: 1.2.4）の degree property に概ね相当する。ただし、上山が category property に含めている名前も本稿では同列に扱う。

格・不合格}」のように二値的なもの、内容（例 太郎の家の火事 [原因:太郎が放火したこと]）などがある。

値がどのような種類のものでも、RF 全体にアクセスできていることが、その部分である特質にアクセスすることの前提となる。例えば、(2)の特質 [身長] にアクセスするには、犯人 RF にアクセスできている必要がある。また、値へアクセスするにはその特質へアクセスできている必要がある。例えば、「2m」と値だけを言われても、それが身長値であることと、それが犯人の身長であることがわからなければ処理ができない。もちろん、値の表現から特質とそれを含む RF が推測できれば問題ない（例 「36.5 度」→太郎 [体温:36.5 度]）。一方、値がわからないまま特質に言及することは可能である。これまでの例では値が定まっていたが、「太郎の血液型がわからない」のように、値が定まっていないこと（太郎 [血液型:x]）や、「太郎の名字が山田から佐藤に変わった」のように特質（[名字]）の値が変化することもある。値が定まっている場合も特質の名称でその値を表せる。例えば、話し手・聞き手が犯人の身長を知っているなら、「犯人の身長」で（犯人の身長としての）2m を表せる。

特質の名称でそれを含む RF に言及することは難しい。例えば、太郎が身長に特徴があっても「身長」などと呼ぶことはできない。一方、メトニミーによって、特質の値でそれを含む RF に言及することは可能である。例えば太郎（[体重:百貫]）のあだ名として「百貫」を使うことは可能だろう。

関係性・リンク先でも、RF 全体にアクセスできていることが、その部分である関係性にアクセスすることの前提となるが、リンク先の RF に別の経路でアクセスすることは可能である。たとえば、太郎が誰の子かわからない場合に、「子」と呼ぶことはできないが、「太郎」で言及することはできる。関係性の名前ではそれを含む RF に言及することができない。たとえば、花子《子:太郎》でも、花子を「子」と呼ぶことはできない。この点は特質・値と同様である◆<sup>9</sup>。

### 2.3.3. ID

ある対象の RF の内容特徴がどれだけ変わっても、同一のものと考えることが人間にはできる。  
<sup>3</sup> このことを捉えるため、RF のデータ構造として、内容特徴とは別立てで、ID を指定する。ID は、RF に対応する対象の同一性を記録する。ワーキングメモリから RF が消えても、次に現れたときに ID が同一であるという質的特徴によって、前と同じとみなされる対象の RF であることが保証される。ID を持つのは RF 全体に対応するものだけで、特質とその値である [温度:26 度] のよう

---

◆<sup>9</sup> [氏家] 例えばこの箇所は、文法の話をしていると受け取っていいでしょうか。RFT の中の話ではなく、RF 内の各種データを自然言語でどう表すかという話ですよね？ 論文の趣旨からすると余談という感じがでしょうか。

[山泉] 余談ですね。→

本筋から外れるが、特質・その値、関係性・リンク先などの違いの言語への反映として、これらの名称でそれを含む RF に言及できるかを少し考えよう。

<sup>3</sup> たとえば、心理学でトンネル効果という現象が知られている（Burke 1952）。トンネルの中にモノが突入していったら、もう一方からモノが出てきたのを見た場合、色・形・大きさが変わっていても、1 つのモノの連続した移動を見ているように感じられることがある。

なものは、どちらも ID を持たない。

ジャッケンドフ（2002/2006）の枠組みで ID にあたる指標素性は 1 種類しかないが、RFT では以下の種類の ID を区別する。1. 同定されている対象に対応する RF は定項の ID (a, b, ...) を持つ。2. 人間は同定されていない対象をも概念化して、他の対象と区別し、追跡することができる。例えば、ジグソーパズルを解いていて、欠けたピース 2 つを探す際、それぞれのピースに対応する RF があり、内容特徴として、周囲のピースから想像される模様・形が入っていると考えられる。なお、これは空間構造（ジャッケンドフ 2012/2019）でコード化される非概念的な内容特徴である。同定されていない対象の RF の ID は自由変項 (x, y, ...) である。未解決事件の犯人を突き止めようとする場合も、犯人に対応する RF の ID が自由変項になっている ((2))。3. 存在しないことがわかった対象に対応する RF の ID は null 値 ( $\phi$ ,  $\phi$ , ...) になる。これはいわばファイルの「廃棄済」マークであり、ID が null 値の RF は記憶に残っても以後基本的に照応されなくなる。4. 叙述名詞句に対応する RF の ID は束縛変項 ( $\alpha$ ,  $\beta$ , ...) で、述語付けされる名詞句に対応する RF の ID に束縛される。例えば、「太郎は学生だ」の「学生」に対応する RF の ID  $\alpha$  は「太郎」RF の ID  $a$  に束縛される ( $\alpha a$  と表記する) ◆<sup>10</sup>。

以上の ID の種類の区別は、どの存在論的範疇（次節参照）の対象に対応する RF にもあるものだが、存在論的範疇によって「同定と個体化に関する特徴づけの条件」（ジャッケンドフ 2002/2006: 373）が異なるため、ID の内実には存在論的範疇ごとに規定されなければならない。たとえば、出来事などの状況に対応する RF の持つ ID は、内容 ID というものである。状況は、内容によって同定されるので、内容そのものが ID を成すということになる ◆<sup>11</sup>。例えば、「松阪の一夜」という名前でも知られる出来事は、1763 年 5 月 25 日、伊勢松阪の新上屋にて、賀茂真淵と本居宣長が国学研究について生涯に一度だけ語り合ったという内容で同定され、この出来事に対応する RF の ID は下線部で記述されるような内容である。この出来事 (ID a) を太郎が知っていて、次郎が知らないとしよう。〈太郎が a を知っている〉〈次郎が a を知らない〉ということは、出来事の同一性には関わり

◆10 [氏家]（あまり論旨には関係ないので修正しなくていいのですが）これは文法理論が言うことに思えます。「解釈の結果を記述する」という方針に反してないでしょうか。

個人的には、「名詞句には RF が対応する」という原則にとらわれすぎず、叙述名詞句みたいな個体を指してなさそうなものは別扱いするのが自然な気がするのですが…。

[山泉] 述語というカテゴリーは、言語のような記号システムがないと出てこないものなので、概念構造だけの進化的段階ではなさそうで、RF と NP の対応をほぼ 1 : 1 にしておかないと、RF のある概念構造が文法に先立たなくなりそうなので維持したいところです。

◆11 [氏家] 主張もその根拠もうまく理解できませんでした。人や物の場合と対比する形で違いを書いていたとわかりやすいかもしれませんが（ただこの箇所は論文の主旨とはそんなに関係ないので）

[山泉] モノについては、前述のように、いくら内容特徴が変わっても、同一性を保った対象として概念化することが可能であり、従って同一性は抽象的な ID の同一性として捉えることが妥当である。一方、状況については、事情が異なる。太郎が花子を料亭でもてなしたという出来事は、その内容が違ったら、例えば、花子と太郎の役割を交換してしまったら同一の出来事とは考えられないし、起こった場所が喫茶店に変わっても同一の出来事とは考えられない。状況は、その内容によって同一性が規定されるため、内容が ID を成すことになる。



のない内容特徴である。また、ID だけでなく特質の値も内容が占めることがある。例えば、筆者が今使っている PC の機種、同サイズのパソコンの中で世界最軽量だという特徴は、知っている人にとって、この機種の RF ([-token]、次節参照) の特質 [特徴] の内容値となり得る。内容特徴であるから、世界最軽量でなくなっても機種の同一性に影響はない。

#### 2.3.4. 存在論的範疇 ONT

素性 ONT は、RF が対応する対象が属する存在論的範疇を表す。どのカテゴリーに属するかによって、内容 ID について論じたようにどのように同定・個体化するかが異なり、どのような内容特徴が可能かも異なる。ONT の素性の値として認められるのは、形而上学において問題となるような最も一般的な範疇だけであるが、複合的な値も可能で、その場合は生成語彙論 (Pustejovsky 1995) でドット事物と言われるものになる。例えば、ONT 人は“体・心”のドット事物として概念化されていると考えられる<sup>4</sup> (ジャッケンドフ 2002/2006: 11 章 10 節)。そうすることで魂の不死、輪廻転生、『君の名は。』のような 2 人の体・心の入れ替わりなどの概念化が扱えるようになる。

物体、場所、動作、数など様々な範疇の対象を名詞句「あれ」や「これ」で指示できることは、言語で表される概念世界においてそれらの存在を人間が認めていることを示す (ジャッケンドフ 2002/2006: 10 章、2012/2019: 29 章)。概念化できるものは全て RF になり得る。どのような存在論的範疇があり、どう同定・個体化しているかは、世界にどういうものが存在すると人間が理解しているかを解明する認知形而上学 (2012/2019: 第 3 部, 山泉 2020c) の経験的な問題で、認知形而上学は同じ視座の意味論である RFT と共に進める必要がある。

言語の観察からもう 1 つ言えることは、人間言語の基盤にある概念世界にはタイプという存在者が認められていることである。「絶滅する」のように、意味的項として個体ではなくタイプを取る述語があることがその 1 つの根拠である (もう 1 つの根拠は同書 p. 210 参照)。したがって、その意味的項となる RF にもタイプとトークンの区別が必要で、トークン素性 [±token] でそれを表すことにする。CPNP との関連で重要なのは、タイプ・トークンの区別がなさそうな存在論的範疇もあるということである。距離はその例である。

- (3) The fish that got away was this/yay long [demonstrating]. (逃げた魚は [動作で示して] こんなにでかかった。) (ジャッケンドフ 2002/2006: 372)

魚の長さと言の間の空間の距離について、「私の手の間の空間と魚の大きさが、19 インチとかであらわされた一般的なタイプの異なる実例であると考えるのは奇妙だと思う」(p. 378) と述べられていて、筆者も同感である。モノについては、タイプレベルの同一性 (今日、太郎と次郎は同じ帽子

<sup>4</sup> ただし、RFT では、語彙的意味の記述をする生成語彙論とは違って、名詞句の意味としてワーキングメモリにおける RF を問題にしているため、発話中の名詞句の理解において片方の範疇しか必要でないものはドット事物として扱わない。

を被っている）とトークンレベルの同一性（太郎はいつも同じ帽子を被っている）がある一方で、距離については、「同じ距離」に同様の違いが考えられないこともタイプ／トークンの区別がないことの根拠となる。ジャッケンドフは、このような範疇は指標素性を持たない可能性があるとしている（p. 378）。

RFT ではこの洞察を次のように活かす◆<sup>12</sup>。指標素性は RFT の ID におおよそ対応するため、距離のような存在論的範疇は通常、RF 全体（常に ID が与えられる）に対応せず、RF 中の〔特質：値〕（例：〔距離：3m〕）に対応する。温度、重さなども同様である。〔±token〕の区別の有無と、独立した RF に対応するかしないかは、このように相関している。独立した RF に対応するか否かを判別する一応の目安として、次が挙げられる◆<sup>13</sup>：A の B に関心があることが、A に関心があることを含意する場合には、B は独立した RF に対応しない。例えば、太郎の身長に関心があることは、他の点では太郎に関心がなくとも太郎に関心があることを含意するため、「身長」は独立 RF に対応せず、太郎 RF の特質に対応すると考えられる。一方、太郎の父に関心があることは太郎に関心があることを含意しないため◆<sup>14</sup>、「父」は太郎 RF から独立した RF に対応すると考えられる。

### 2.3.5. @ 位置付け

人間は、(i)自分にとっての(ii)現実世界の(iii)実態以外にも想像・理解できる。(i)自分のものとは異なる他人の心を推測できる。自分の心が他人にどのように推測されているのかを推測することもでき(再帰的読心)、この能力の高度なものが OIC を可能にする(スコット=フィリップス 2015/2021)。(ii)物語の世界など現実世界以外の世界も概念化できる。(iii)任意の世界について、実態とみなしているものとは異なる様相を想像することもできる。例えば、永久機関が現実世界に存在することを願望し、それがあつた世界の事態を思い描くことができる。(i)(ii)(iii)を組み合わせることも可能で、他人が理解する物語世界において登場人物に望まれていることなども概念化できる。つまり、自分にとっての現実世界の実態以外に位置付けられる対象に対応する RF を人間は抱くことができる。たとえその対象と対応するものが自分にとっての現実世界の実態にもあつても、内容特徴などが異なることがあるので、RF には位置付けを記録しておく必要がある。たとえば、話し手が想定する聞き手の「竹取物語」の物語世界におけるかぐや姫の願望という位置付けは、@話し手>聞き手>物語世界>かぐや姫>願望のように表記する。

◆<sup>12</sup> [氏家] このあたりの議論は面白いと思いました。

[山泉] ちなみに、距離を RF 化する距離マニアもいます。

◆<sup>13</sup> [氏家] この部分は 2.3.2 に書いてもいいかもしれません

[山泉] ですね。「特質によってその値は様々で、〔合否：{合格・不合格}〕のように二値的なもの、内容（例 太郎の家の火事〔原因：太郎が放火したこと〕）などがある。」の次あたり？

◆<sup>14</sup> [氏家] 小さなことですが、「太郎の父に関心がある」という文は曖昧で、一つの読みでは太郎に関心があることを含意するような気がしました。

[山泉] 意味論的曖昧性かは疑問。

「父」→「父親」にした方がよさそう。

言語コミュニケーションにおいてこのような位置付けは通常表現されず、聞き手は発話の名詞句に対応する RF の位置付けを推測論する必要がある。2.1 で述べた通り、RFT では、発話における名詞句の話し手の意味とは、話し手が推定した聞き手の心における RF だと考える。つまり、名詞句の RF は話し手が想定した聞き手の心に位置付けられるのがデフォルトであり、「話し手が想定した」を省略した「@聞き手」が名詞句に対応する RF のデフォルトの値になる。さらに、話し手が想定する聞き手の心において(i)聞き手以外の心(ii)現実以外の世界(iii)実態以外の様相に位置付けられることがあり得る。例えば、「シャーロック・ホームズは存在しない」という言明は、主語名詞句を「@聞き手>シャーロック・ホームズの物語世界」に位置付けるなら偽、「@聞き手>現実世界」に位置付けるなら真である◆<sup>15</sup>。

2.1 で述べた不変性の主張に従えば、RF ごとの@に加えて、内容特徴ごとの@も必要になる。例えば(4)の4つの事態を人間が区別できるからである。犬 (ID a) の飼い主が太郎 (ID b) だとすると、この4つは(5)のように書き分けられる。内容特徴ごとの@は RF の@と値が異なる場合にだけ表記することにする。

- (4) a. リアルな犬をリアルに飼う。  
 b. イマジナリーな犬をリアルに飼う◆<sup>16</sup>。  
 c. イマジナリーな犬をイマジナリーに飼う。  
 d. リアルな犬をイマジナリーに飼う。

([https://twitter.com/chan\\_watashi/status/1177412202430484481](https://twitter.com/chan_watashi/status/1177412202430484481) より抜粋)

- (5) a. 「犬」/ID a/@聞き手/CNT 〈b が a を飼う〉  
 b. 「犬」/ID a/@聞き手>太郎の想像/CNT 〈b が a を飼う〉  
 c. 「犬」/ID a/@聞き手>太郎の想像/CNT 〈b が a を飼う〉@太郎の想像  
 d. 「犬」/ID a/@聞き手/CNT 〈b が a を飼う〉@太郎の想像

◆<sup>15</sup> [氏家] (ただの感想ですが) 真や偽をどのような意味で使っているのか少し疑問。真偽が世界との対応で決まるとしたら、現実世界や物語世界を聞き手の心の中に位置付けた場合、真偽が何に照らして判断されることになるかわからなくなる気がしました。

[山泉] 心の中の現実世界 (の認知的対応物)、物語世界の認知的対応物が言語と独立してあって、それと、言語を参考に組み立てた概念構造を照らし合わせて、矛盾したり食い違ったら偽、適合したら真です。(ジャッケンドフ 2019)

◆<sup>16</sup> [氏家] この例文が表す状況がよくわかりません。(c) と具体的に何が違うのでしょうか。それぞれの例文がどういう意味で解釈され、それが (5) の表示でどう捉えられているかを言葉で説明する必要があります。

直感的には、「飼う」という動詞が表す事態が現実のものとなるためには、対象となる個体が現実のものである必要があるように思います。「想像する」「探す」などの動詞はそれと違って対象が現実になくとも動詞の表す事態が現実のものでありうと思います。

[山泉] 註 想像が追いつかない読者のために補足すると、イマジナリーフレンドのようなものとして、イマジナリー飼い犬がいるのが b である。一方、実際には飼っていない実在の犬に付いて歩いて飼い主感覚を味わうのが d である。b と d を合わせたのが c である。

## 2.4. インタフェース規則

以上のようなデータ構造を持つ RF は名詞句とどのように対応するのか。RFT は統語構造—概念構造間のインタフェース規則として次の 2 つを主張する。他にも統語構造—概念構造間にインタフェース規則はあり、語彙項目の多くは特定のなものを含む。

- (6) 規則 1. 統語構造の名詞句 1 つは、概念構造の RF1 つ（あるいはその部分構造である特質や値など）に対応する（イディオム *kick the bucket* の *the bucket* などは例外）。
- (7) 規則 2. 名詞句 a を主要部とする名詞句 b の中にある名詞句 c に対応する RF（またはその部分構造）は名詞句 a・名詞句 b に対応する同一の RF（またはその部分構造）の中に現れる。（例えば名詞句 *the cat* (ID a) が主要部の名詞句 *the cat in the box* の中にある名詞句 *the box* (ID c) に対応する RF<sup>◆17</sup> は、名詞句 *the cat* と名詞句 *the cat in the box* に対応する RF の中の内容特徴 〈a is in c〉に現れる。）

＊

本稿は N-意味理論と RFT による CPNP の分析の優劣を論じる。一般に、異なる枠組みの間に通約不可能性があるとき、どちらの分析がより妥当かを判定することは極めて難しい。RFT と N-意味理論は前提となる視座が大きく異なる。N-意味理論が受け入れていない前提に立った批判はフェアではなく、受け入れられない。「競争するパラダイムの主張者たちは、[...] 相手側が必要とするような非経験的仮定のすべてを、他の側では認めようとはしないだろう」(クーン 1970/1971: 167) という事情はここでも当てはまる。N-意味理論の前提は不明な部分が多いとは言え、言語は OIC のためにデザインされているという RFT の言語観が受け入れられないことは明らかである(西山 2019b)。畢竟、「パラダイム間の競争は、証明によって結着をつけられるような種類の戦いではない」(クーン 1970/1971: 167)。しかし、古いパラダイムを危機に陥れた問題を新しいパラダイムが解けるという主張は強力なものとなる (p. 173)。CPNP を分析する次節以降では、まず N-意味理論の分析を N-意味理論の枠内で提示し、それを N-意味理論の枠からなるべく出ずに批判的に検討して、どのような問題があるのかを述べる。次に CPNP を RFT の立場でも分析して、N-意味理論の分析にあるような問題がないことを示す。つまり、「通常科学→危機→科学革命→新パラダイムの形成」という科学革命の流れに沿った論述(同書)を行う。

## 3. N-意味理論の潜伏命題文の分析の批判的検討

### 3.1. 変項名詞句としての潜伏命題名詞句

(8)には曖昧性がある(西山 2013: 390)。1 つの解釈は(9)のように下線部名詞句が [ ] 内の間接疑問節でパラフレーズされる潜伏疑問(西山 2013)の解釈である。この場合、「わたくし」は花子の年齢を知らない。もう 1 つの解釈は、(10)のようにパラフレーズできる。

◆17 [氏家]「対応する RF の ID」とする？

[山泉] a is in c は RF の代表として ID の a, c を使っているのだとしたら、そのまま。

- (8) わたくしは、花子の年齢が気になる。(西山 2013: 390、下線も原文)
- (9) 《わたくしは、[花子の年齢がいくつであるか] が気になる》
- (10) 《わたくしは、[花子の年齢は、現にそうであるしかじかの年齢である] ということが気になる》

つまり、「わたくし」は花子の年齢を知っていて、花子はその歳であることが不都合だと思っているということである。この解釈は、[ ]が間接疑問節でないことから、潜伏疑問の解釈とは言えない。

[ ]が変項を含まない命題を表すこのような構文を西山は潜伏命題文と呼び、そこに含まれる「花子の年齢」のような名詞句を潜伏命題名詞句（以下、CPNP）と呼んでいる。この種の文の例として他に以下の例が挙げられている（p. 389、下線は原文）。ただし、fは「なぜその会社を志望したか」「何がその会社を志望した理由か」のように間接疑問節でパラフレーズできるため、例として適切ではないだろう◆<sup>18</sup>。以下の議論でも除外する。

- (11) a. その箱は、入れた荷物の重さのために底が抜けた。  
b. 花子は、年齢のせいで、就職がなかなかできないようだ。  
c. 東京―熱海間の距離が太郎を疲れさせた。 d. 社長はそのプールの深さが気に入った。  
e. 太郎はその会社の初任給に驚いた。 f. 太郎はその会社を志望した理由を書いた。  
g. 太郎はその部屋の天井の高さに驚いた。

N-意味理論は、CPNP も潜伏疑問名詞句と同様、指示的名詞句ではないと主張する。指示的名詞句とは、世界の中の対象を指示するために用いられている名詞句（西山 2007: 5）とされ、(8)の「わたくし」、(11)aの「その箱」、(11)dの「社長」はその例である。一方、(12)の「そのドアの幅」は、「(仮にそれが 85cm だとしても) 85cm を指示するわけではない」（西山 2013: 387）とされる。<sup>5</sup>

- (12) そのドアの幅が、子供たちの部屋からの脱出を妨げた。

N-意味理論は、潜伏疑問名詞句だけでなく、CPNP も変項名詞句の一種と分析する。変項名詞句とは、「命題関数を表す名詞句であり、変項の値を充足することによって指定文の基本的意味構造を形成するもの」（西山 2007: 10）である。倒置指定文、絶対存在文、変化文など多くの構文の分析に用いられていて、N-意味理論の最重要概念（西山 2013: 331）とされる。「潜伏命題文を構築する

◆18 [氏家] ちなみにfはどう分析されるのでしょうか。

[山泉] 理由はコトをパラメータにとるので、

太郎 a がその会社 b を志望した[理由 : x]、太郎が x を書いた

<sup>5</sup> このことを示すためにも用いられた N-意味理論でよく見られる論法があり、それには問題があることを山泉（2021: 4.2 節の中の「名詞句の置換不可能性によって非指示性を示す議論について」）で論じた。

名詞句も、（倒置）指定文の意味構造を有する名詞句を基礎にして意味論的に値が充足された結果」（p. 391）とされる。その例として、(12) [そのドアの幅が、子供たちの部屋からの脱出を妨げた。] の分析を引用する。

[(12)] は、しかるべきコンテキストでは、[(13)] のような表意を表しているといえる。

(13) 《[そのドアの幅は 85cm だ] ということが、子供たちの部屋からの脱出を妨げた》

(14) したがって、[(12)] の「そのドアの幅」は、意味の深いレベルでは [(15)] のような命題関数を表している変項名詞句であり、その変項の値は、まさに当該のドアの幅を表示する数字、N によって充足されるのである。

(15) [そのドアの幅は x である]

(16) [そのドアの幅は N である]（但し、N は、当該のドアの幅を表す数字）

より平易な言い方をすれば、[(12)] の言語的意味は [(17)] のようなものとみなすべきである。

(17) 《[そのドアの幅は、現にそうであるしかじかの幅である] という事実が、子供たちの部屋からの脱出を妨げた》（西山 2013: 388、番号は引用者）

### 3.2. N-意味理論の分析への 6 つの疑問

N-意味理論による(12)の分析を例に、CPNP についての所説を紹介し、批判的に検討していく。この分析には多くの疑問がある。第一に、CPNP は変項が埋まっているのだから、「変項名詞句」とは言えないのではないかと？変項の値の充足のされ方という観点から考えると、潜伏疑問文の変項名詞句の変項は、少なくとも述語によっては充足されない（例「犯人がわかった/わからない」）。倒置指定文（例「犯人は太郎だ」）では、主語名詞句の表す命題関数（[x が犯人だ]）の変項を述語名詞句の表す値（太郎）が充足するものの、主語名詞句単独の意味としては、値は充足されていないとされる。一方、潜伏命題文では、値が文中の他の表現が表すものが埋めるまでもなく最初から定まっています、文の表す事態の結果変わるものでもなく、そうでなければ潜伏命題文にはならない。したがって、N-意味理論は、CPNP を定項名詞句と呼ぶべきかもしれない。

西山（2013）は(12)の「そのドアの幅」が表す命題関数についてこう述べている。「ここで注意すべきは、[(15) [そのドアの幅は x である]]、あるいは [(16) [そのドアの幅は N である]] の [ ] の部分は倒置指定文構造を有しているという点である。したがって、[(12)] の意味構造の背後には倒置指定文構造が隠れていることが分かる」（p. 388）。「[(15)、あるいは [(16)]] と変項を含んだ方をものをも忍び込ませているが、値が明らかである定まっている以上、(16)の方が正確だろう。しかし、(16)には変項がなく、代わりに定項があり、変項名詞句とは言い難い。これは呼び方だけの問題ではないことに注意されたい。名詞句の意味表示に変項の無い単なる命題ではなく、命題関数の変項の値が埋まるという構造、特に倒置指定文という名詞述語文の意味構造があるということが正当化されていないからである。倒置指定文構造でなければ、定義上、変項名詞句とは言えない

◆<sup>19</sup>。N-意味理論は CPNP を広く知らせたものの、これを分析する適切な道具がなく、変則事例とせざるを得ないことになる。

第二に、「潜伏命題文」に潜伏しているものはそもそも命題と呼べるものなのだろうか？◆<sup>20</sup> (18) が示すように、CPNP として使われていた名詞句に真偽を述語付けられないことに注意しよう（参考：Ginzburg and Sag 2000: 68◆<sup>21</sup>）。この場合には潜伏命題文にならないということである。(18) に「85cm という～」 「3m である～」のように値を明示しても容認できない。

(18) ?? {そのドアの幅／そのプールの深さ} は {真だ／偽だ／正しい／間違っている}。

(19) Cf. {そのドアの噂／そのプールの話} は {真だ／偽だ／正しい／間違っている}。

「ドアの幅」などの名詞句は、このような環境だけでなく、他の文脈でも命題を表せるとは言い難い。(20)と(21)を比べると、目的語名詞句と述語の組み合わせにより容認度に幅はあるものの、全体的に(20)より(21)の容認度が高いだろう。

(20) ?太郎は {そのドアの幅／花子の年齢／その会社の初任給} を {信じている／疑っている／否定している／証明した}。(命題述語、目的語は命題を表す)

(21) 太郎は {そのドアの幅／花子の年齢／その会社の初任給} を {知っている／発見した◆<sup>22</sup>／忘れた}。(叙実 (factive) 述語、目的語は事実を表す) <sup>6</sup>

---

◆<sup>19</sup> [氏家] この部分は第一の疑問とは別の論点と理解しました。

第一の疑問は「命題関数の変項の値が充足したもの」という主張を受け入れた上で、それは変項名詞句とは呼びづらいのではないかとというもので、ここで述べられているのはそもそも命題関数の変項の値を充足するという構造が本当にあるのかというもので、分けて提示した方がいいのではないのでしょうか？

第一の疑問については呼び方の問題という印象を受けました。

[山泉] 分けて提示して、7つの疑問にします。(どんどん増える)

◆<sup>20</sup> [氏家] この議論は納得できました。ただ、N 意味理論ではここでの命題と事実の区別を設けていない以上、「命題」を広い意味で使っていると考えるのがフェアだと思います。

[山泉] p. 16 [の第一段落末尾] で付け足しました。

◆<sup>21</sup> [氏家] ただのアイデアですが Ginzburg and Sag 2000 を紹介する形で命題と事実の違いを箇条書き的にまとめて提示するとわかりやすいかと思いました。(真偽を述語づけられるか・述語との対応・因果的力を持つか等)

[山泉] →以上の命題と事実の違いをまとめる。命題は以下の性質を持つ。断定の対象になる。真偽を述語付けられる。共有基盤を更新できる。命題述語の目的語によって表される。因果的な力を持たない。一方、事実は以下の性質を持つ：断定の対象にならず、リマインドや感嘆の対象になる（※命題は？）。真偽を述語付けられない。共有基盤を更新できない（新たな情報をもたらさない）。叙実述語の目的語によって表される。因果的な力を持つ。

◆<sup>22</sup> [氏家] 「発見した」はコロケーションが悪いように思いました。「明らかにした」とかでしょうか。

[山泉] 「明らかにした」にします。元は Ginzburg and Sag の discover です。

<sup>6</sup> 「伝えた」「報告した」「推測した」「予測した」「アナウンスした」などは叙実述語ではなく *resolutive predicates* (Ginzburg and Sag 2000: 3.2.1) と言われるもので、事実以外に命題や出来事も選択するものである (p. 72・註 23)。これらは事実以外を表す可能性があるため、ここでの議論から除外する。

(20)の述語は、命題の真偽が問題になることから目的語が命題を表すことが明白で、例えば「そのドアの幅」を「そのドアは85cmであること」のように潜伏命題名詞句として解釈すれば意味を成すはずである。しかし文の容認度が低いということは、語用論的に絶好のこの機会にさえ命題として解釈できないことを示す。一方、(21)の述語は叙実述語で、同じ名詞句を問題なく項に取れる。しかし、これらの述語の目的語が表すのは、疑問（question）や命題ではなく、それらと存在論的に異なる意味論的对象の事実（fact）である（Ginzburg and Sag 2000:3.2.3、これらを区別することの正当化、及び分類体系も同書参照）。N-意味理論ではこれらの概念を区別せず、潜伏命題文の「命題」はこれら全てを含むとも考えられるが、潜伏命題文と言われる現象においてこの区別が関与的であれば、区別して検討しなければならない。

(21)の述語は従来潜伏疑問述語とされていたもので、そのいくつかは、西山（2013:375）の潜伏疑問述語のリストにもある。その目的語は疑問を表すと想定されていた。たしかに、これらの名詞句は、「ドアの幅はどれ位か」のような疑問節に置き換えられる。しかし、その代わりに「ドアの幅は{85cm／ある長さ}だ」という「こと／事実」のような事実を表す節にも置き換え可能で、しかも、「ある長さ」の場合は疑問節「ドアの幅はどれ位か」とほぼ同じ意味と言える。そして、これらの述語の事態において、幅や年齢などの値は太郎の心において定まっている（「忘れた」の場合は定まっていた）。また、「尋ねる」「自問する」「調査する」のような疑問埋め込み述語（question embedding predicates、Ginzburg and Sag 2000: 3.2.1）の場合とは違って、誰かが何かについて疑問に思うということは必ずしも伴わない。<sup>7</sup>したがって、(21)の目的語は事実を表すと考えるべきである。もっとも、これは潜伏命題文についての議論ではない。

潜伏命題文と言われるものにおいても、問題の名詞句は事実を表すと筆者は主張する。実際に、西山（2013）は、潜伏命題文(12)のパラフレーズ(17)において「事実が」と言っているし、この「事実」を「命題」に変えると次のように奇妙な日本語になる：??《[そのドアの幅は、現にそうであるしかじかの幅である]という命題が、子供たちの部屋からの脱出を妨げた》。一方、事実は子どもたちの部屋からの脱出を妨げ得る。次例が物語るように、事実は命題と違って対照的に因果的な力を持つという重要な違いがあるからだ（鈴木他 2014: 4-5；Ginzberg and Sag 2000: 73、次例も同頁）。

(22) The {fact/#proposition} that Tony was ruthless made the fight against her difficult.

事実は、記述内容を持っているけれども、命題と違って断定の対象とならず、その代わりに、リマ

<sup>7</sup> 叙実述語の補文の疑問節・目的語名詞句は述語による強制（coercion）によって疑問を解決する事実を表していると Ginzburg and Sag（2000: 3.2.3, 8.3.1）は分析している。本稿でもこれを参考にした CPNP の分析を提示する。(21)の目的語が疑問ではなく事実を表すとなると、潜伏疑問文に関する議論（西山 2013, 山泉 2021 など）の多くも見直しを迫られるが、本稿の射程を超える。なお、Ginzburg and Sag の分析によると、平叙文は命題も事実も表示可能で、叙実述語の補文としては、強制無く事実を表す。



インドや感嘆の対象になる（同書: 3.2.3）。<sup>8</sup> そして、命題と事実には、命題だけが共有基盤を更新できるという違いもある。<sup>9</sup> 例えば、感嘆文は一般に事実を表すが、そのために感嘆文で質問に答えるのは不適切である。

(23) A: How tall is he? B: #How tall he is!.

これまでの例でも、CPNP の値は現にそうであるしかじかの長さのように既に定まっていて、そこで新しい情報をもたらされることはない。以上の理由から、N-意味理論の“潜伏命題名詞句”には命題ではなく事実が潜伏していると考えべきであり、本来「潜伏事実名詞句」と呼ぶ方が適切だろう。もっとも、本稿ではそれを承知の上で一貫性を重視して、以下でも CPNP と呼ぶ。

N-意味理論が CPNP を潜伏命題名詞句と呼ぶのは、これを命題関数を表す変項名詞句として分析するからだろう（もっとも、前述の通り、CPNP の“変項”は埋まっている）。CPNP が命題ではなく事実を表すなら、変項名詞句の表す変項を含んだ命題からは更に遠ざかる。今後、N-意味理論は、変項名詞句が何らかの過程を経て事実を表すようになるという風に説を改訂することは可能かもしれないが、西山（2013）の説では、事実を表すという点が捉えられていないのは間違いない。以上の議論は、感嘆文が表示するのは命題ではなく事実であるという議論（Castroviejo-Miró 2006: 5.1, Ginzberg and Sag 2000）を潜伏命題文に応用したものであり、潜伏感嘆文の N-意味理論の分析（熊本 2018）にも同じ批判が当てはまる。

第三の疑問に移る。CPNP が命題関数を表す「意味の深いレベル」((14)) とは、具体的にはどのようなレベルなのか？ (8)は、潜伏命題文の読みか潜伏疑問文の読みかによって意味論的に曖昧とされている（西山 2013: 390-391）。N-意味理論においては、論理形式という意味論レベルにおいて CPNP と潜伏疑問名詞句は、どちらも変項名詞句であるにも関わらず区別されているのだろうか。統語論における派生のようなものを想定し、論理形式よりさらに“深い”レベルを新たに設けるのだろうか。潜伏疑問文については、「当該名詞句が変項名詞句であり、主動詞が引き金になって、変項名詞句の変項の値を Wh 化している構文といえる」（西山 2013: 380）と述べられている。同様に潜伏命題文についても、「当該名詞句が変項名詞句であり、主動詞が引き金になって、変項名詞句の変項の値を N 化している構文」とするのかもしれない。しかし、そもそも潜伏疑問名詞句が変項名詞句になるのは、その名詞句が潜伏疑問述語の特定の項（たとえば、「尋ねる」の目的語）であるからだろう。述語がまず変項名詞句という意味機能を付与し、その後で変項を wh 化/N 化するのだ

<sup>8</sup> ただし、事実は可能性 (possibilities) の一種であって、以下のように異議申し立てられることがあり、取り消し可能 (defeasible) である (Ginzburg and Sag 2000: 77)。

(i) A: I regret the fact that Kim left. B: It's not a fact. She's hiding in my cupboard. (同)

なお、Castroviejo-Miró (2006: 163) では、事実の記述内容を当然のものとみなしているのは話し手とされているが、RFT の立場では、話し手が想定した聞き手と考えるべきだろう。ただし、潜伏命題名詞句の中でも、潜伏感嘆名詞句（熊本 2018）の場合は、話し手とすべきかもしれない。

<sup>9</sup> Castroviejo-Miró (2006: 5 章) は、感嘆文についてこのことを述べているが、他の表現による事実にもこのことは当てはまるだろう。

としたら、全くの二度手間ではないだろうか。なお、Ginzberg and Sag (2000: 3.6.1) の枠組みでは、事実は素性として命題を含むという関係にあり、このことは N-意味理論にとってのヒントとなるかもしれない。

第四の疑問は、次のような例は変項名詞句として分析するには無理があるのではないかということである。

(24) 医師国家試験の合否が太郎の人生を狂わせた。◆<sup>23, 10</sup>

一般に、変項名詞句の表すものは、単に変項を含んだ命題であれば何でもよいわけではない。指定文構造の命題関数に限られ、これは変項名詞句の定義に含まれている（西山 2013 など）。潜伏疑問文の場合には、述語が変項名詞句の命題関数の変項を wh 化し、指定コピュラ文構造の wh 疑問が潜伏するとされる。たとえば、次例の下線部は、[x が花子の出身地だ]という命題関数を表す変項名詞句である。

(25) 太郎は、花子の出身地を知りたい。

この x が潜伏疑問述語によって wh 化されることで、どこが花子の出身地かという指定疑問文意味構造が形成され、述語「知りたい」の対象となる（西山 2013: 第 13 章 3）。しかし、そのような一般化は、「合否」「当落」「有無」「勝敗」のような名詞（山泉 2019 の「潜伏極性疑問名詞」）が主要部の名詞句に疑問が潜伏する場合には当てはまらない（山泉 2021: 3.3）。

(26) 太郎の医師国家試験の合否がわからない。

もし下線部に命題関数が潜伏しているとすれば、その変項は、命題の肯否、つまり極性の部分にあるだろう。同様に、(24)の下線部も、指定文構造の命題関数を表す（そしてその変項が N で埋まっている）とは考え難いため、変項名詞句ではないのではないか。以下の例も同様である。

(27) 太郎と花子には多くの共通点があるが、2 人を引き寄せたのは、タバコを吸う吸わないだ。2 人とも今の若い人には珍しい喫煙者なのだ◆<sup>24</sup>。

◆<sup>23</sup> [氏家] 個人的には、少し不自然に感じます。もう少し自然な例がもしあれば、そちらを提示した方がいかもしれません。

[山泉] 派閥の領袖の法案への賛否が～？

<sup>10</sup> 山泉 (2019: 3.3) では、「合否」のような潜伏極性疑問名詞は、潜伏命題文には使えないと述べられているが、誤りである。ただし、そこで例に挙がっている(i)は、(8)とは異なり、潜伏疑問文の読みが圧倒的に優勢で、潜伏命題文の読みは不可能であるように筆者には感じられる。

(i) 太郎の合否が気になる。（西山佑司、p.c.）

◆<sup>24</sup> [氏家] この例文も少し不自然に感じました。他の母語話者にも聞いてみてください。

第五の疑問は、やや俯瞰した視座から N-意味理論を捉えた場合に起こるもので、CPNP に限るものでもないが、ついでに述べておく。N-意味理論では、あるレベルでは同じ名詞句が指示的名詞句になったり、変項名詞句になったりする。たとえば、「このドアの幅」は、次例 a では世界の中の対象を指示し、b では命題関数[x がこのドアの幅だ]を表すとされる。

- (28) a. このドアの幅は、力士達には狭すぎる。  
b. このドアの幅は、60cm だ。

N-意味理論によると名詞句に広く見られるこの多義性をどう理解すべきか？ なお、「そもそも、文中のある名詞句について、それを指示的名詞句でもなく、変項名詞句でもない、中立的なものを仮定することなどは不可能である」(p. 265) とされる。もちろん、N-意味理論の答えは、名詞句の意味機能によるというものであろう。しかし、なぜこの 2 つの意味なのかは問われてもよいだろう（他に、他の名詞句の指示対象に帰される属性を表す叙述名詞句も N-意味理論では認められているが、それは述語名詞句に限られるようである）。なお、RFT では、名詞句に対応する RF の特質値・リンク先や ID が定項か自由変項かという違いによってこの 2 種の違いの多くの場合は捉えられ、定項か自由変項か以外は同じであることから共通性も捉えられる。

以上は N-意味理論を前提としたもので、理論内の解決は N-意味理論の推進者に委ねたい。最後の疑問は RFT にも直接関係する：どのような性質を持つ名詞句が CPNP になるのか？ N-意味理論の命題関数の値が埋まっていれば何でも CPNP になるのではない（次例参照）◆<sup>25</sup>。太郎が校長先生だとしよう。それでも次の文を、これ自体は問題のない文であるけれども、(30)のように解釈することは難しく、太郎が通せんぼしたという解釈になってしまう。

- (29) 校長先生が子どもたちの部屋からの脱出を妨げた。  
(30) 《[校長先生は太郎だ]》ということが、子供たちの部屋からの脱出を妨げた》

したがって、この場合、(12)の西山の分析の如く次のように分析するわけにはいかない。「校長先生」は、意味の深いレベルでは「校長先生は x である」のような命題関数を表している変項名詞句であり、その変項の値は、まさに当該の校長先生を指示する名前、「太郎」によって充足されるのである……？ (29)の「校長先生」は CPNP とは言い難い。この文の述語は(12)のものと同じであることに

---

(議論は成り立っていると思います。)

[山泉] 燃えるキリンさんとワタシ・チャンさんに聞きました。

◆<sup>25</sup> [氏家] CPNP として解釈されない以上、N 意味理論では命題関数を想定しないことになるので、この書き方だと誤解を招きそうです。

[山泉] →値が埋まっている命題関数の形で表示できれば何でも CPNP になるのではない（次例参照）

注意しよう。「幅」だけでなく「校長先生」や「太郎」も「妨げる」の項になれるし、しかも、その方がおそらく「妨げる」の普通の用法である。どのような名詞句が CPNP になるか、N-意味理論の分析から予測することはできない<sup>◆26</sup>。また、CPNP を項にとれる述語には共通した意味的特徴があるのだろうか。これについても、N-意味理論の分析は特に何も教えてくれない。N-意味理論から離れ、RFT の枠組みで考察するときである。

## 4. RFT による潜伏命題名詞句の分析

### 4.1. RFT による潜伏命題名詞句の特徴づけ

CPNP は文中において事実を表すことを前節で述べた。これは RFT の分析においても維持される（事実は存在論的範疇と考えられる）。それに加えて RFT では、CPNP は字義通りの意味、つまり概念構造へのインタフェース制約から合成的に得られる意味には<sup>◆27</sup> 特質または関係性に対応する名詞句で、用いられたコンテキストでは、問題の位置付け（@）において値が定まっている、とデータ構造によって特徴付けることができる（関係性の例は後に詳述する）。例えば、(12)の「そのドアの幅」は「そのドア」RF の特質 [幅：a] に対応する。

問題の位置付け（@）は、CPNP が意味的項となっている述語が「惹かれた」「誇っている」のように主語名詞句の指示対象の心を描写する場合は、（話し手が想定する聞き手の心における）想定されるその人の心である<sup>◆28</sup>。例えば、(31)の「惹かれた」、(32)の「誇っている」ということが起こるのであれば、麦茶の容量は太郎の心、プールの深さは校長の心において、定まっていると考えられる。

(31) 太郎はそのお徳用麦茶の容量 600ml に惹かれた。

(32) 校長はこのプールの深さ 3m を誇っている。<sup>11</sup>（以上 2 例、萩澤大輝、p.c.）

位置付けの心の持ち主は、言語化される必要はなく、推論できればよい。次例では、太郎[年齢:a]は、太郎の年齢を履歴書からであれ、見た目などからの推測であれ、ある程度正確に知っていた採用担当者の心に位置付けられる（採用担当者が太郎の年齢を全く知らなかったら、年齢で落とすことはあり得ない）。

◆26 [氏家] ここはその通りだと思いました。

◆27 [氏家] ここでの字義通り＝インタフェース制約から合成的に得られる意味？（確認）

[山泉] yes

◆28 [氏家] ドアの幅が脱出を妨げたように認識が関わらない場合、位置づけはどこなのでしょう。

[山泉] 話し手が想定する聞き手の現実の実態がデフォルトです。

<sup>11</sup> (32)を否定（～誇っていない）にすると、曖昧性が生じ、校長はプールの深さを知っているものの誇っていない状況だけでなく、校長がプールの深さを知らず、誇ってもいない状況も表すことができる。後者の場合は、プールの深さが校長の心において定まってい、それを誇っているということ全体を否定のスコープとしたものである。RFT における否定の扱いは、稿を改めて論じたい。

(33) 太郎は年齢であの会社に採用されなかった。

値は、文中で明示されていなくても、また、具体的な値を知らずに目視などによって分かっているだけでも、問題の位置付けにおいて定まっているとしてよい。

#### 4.2. 潜伏命題名詞句が事実を表す理由と潜伏命題名詞句を項にとれる述語の特徴

N-意味理論の分析は、CPNP の表すものの意味論的タイプを命題としているが、そうとは考えにくいという問題があった。RFT では次のように分析する。「ドアの幅」のような RF の特質（ドア [幅]）または関係性に対応する表現は、特質または関係性の値が定まっていると考えられるコンテキストにおいて、単にその値（85cm）になっている特質または関係性としてではなく、その事実《ドアの幅が 85cm であること》に相当する解釈になる。そうなるのは、述語による強制（coercion）が働いているからだと考えられる。ただし、ここで強制しているのは叙実述語ではなく、「妨げる」のような因果関係を表す述語である。<sup>12</sup>

CPNP の述語は、「妨げた」「驚いた」「気に入った」など、いずれもこの値がどうなるかを問題にしていない、換言すると、潜伏命題文では値の変異の可能性が問題となっていないという点も重要である。この点でこれらの述語は、「忘れた」「決める」「尋ねる」などのいわゆる潜伏疑問述語と異なる。西山（2013）の潜伏命題文の例（(12)(11)a-g）を見る限り、述語は「疲れさせた」「気に入った」「驚いた」「妨げた」と一見雑多で、潜伏疑問述語と違って値がどうなるかを問題にしていないという共通点はあるものの、「潜伏命題述語」を意味的に特徴付けることは難しそうに見える。しかし、いずれも因果関係を表し◆<sup>29</sup>、CPNP が原因項を表すという共通性があることはこれまで指摘されていなかったようだ（この点でも潜伏命題文から除外した(11)fの「書いた」は異質であり、除外することが正当化される）。前述の通り、事実は因果的な力を持つ。例えば「妨げる」のガ格項にはそのことが求められるために、(12)の「ドアの幅」は事実を表すのである。なお、結果事態は、「気に入った」「誇っている」のように心理的なものであることもある。

#### 4.3. 結果項を表す潜伏命題名詞句は可能か

西山（2013）の CPNP の例は全て原因項を表していた。筆者が新たに挙げた例も同様である。ここで、CPNP は原因となる事実しか表せず、結果となる事実を表わせないのかを検討しておく。結果の事実を表す例を作ってみると、次のようになる。

<sup>12</sup> CPNP は一種のメトニミーであると言える。述語による強制が起こっている点は、次例のような典型的なメトニミーと共通している。

(i) やかんが沸いている。（沸くのは固体のやかんではなく液体であるやかんの中身）

◆<sup>29</sup> [氏家]「誇っている」も因果関係？

[山泉] ある事実の結果、誇っているという心的状態が引き起こされたということで、「知っている」ではなく「知る」が変化を含意するのと同様に、「誇る」は変化を表すと考えます。

(34) ??インド亜大陸の衝突がヒマラヤの高さを引き起こした。<sup>13</sup>

筆者の語感では、述語の強制によりこの文の理解は可能だけれどもかなり不自然であるに感じられる。結果の事実を表す CPNP は、明らかに筆者の言語知識に定着していないと思われる。また、筆者にとって単純に定着していないだけでなく、CPNP の特徴と相容れない部分が結果項にはある。値が定まっていて、その変異の可能性が問題にならないということが CPNP の特徴に含まれていた。因果関係の結果項であるということは、問題の名詞句の問題の値（ヒマラヤ[高さ:□]の□）が変わるということになるからである。さらに、この場合、「ヒマラヤの高さ」の値が高い方に限定されている点も、原因項の CPNP と異なる。例えば、(11)g（太郎はその部屋の天井の高さに驚いた。）は、天井が低くて驚いた場合の記述にも用いることができる点で (34)とは対照的である。

今後、詳しい調査によって意外にも(34)のような実例が多く見つかる可能性がないわけではないが、以下では、CPNP が結果項を表すことは不可能<sup>◆30</sup>と想定する。

#### 4.4. 関係性の潜伏命題名詞句：値が独立 RF に対応するもの

西山（2013）の例は全て、CPNP が RF の関係性ではなく特質に対応する例だったものの、関係性を表す名詞<sup>◆31</sup>を主要部とした CPNP も可能である。例えば、大学教員の公募の書類審査に通過した太郎が推薦人を挙げることを求められ、最近その大学を退職した次郎を挙げたとしよう。しかし、次郎は実はその大学で極めて評判が悪く、太郎はそんな次郎を推薦人に挙げたために、落選したとしよう。その場合、次のように言うのは自然だろう。

(35) 太郎は推薦人で落選した。（田中太一、p.c.）

この「推薦人」は、太郎 RF の関係性《推薦人：次郎》に対応する。しかし、この名詞句は原因項をマークできる「で」（例 火事で死ぬ）でマークされていて、太郎が落選したことを引き起こした原因と解釈することで最適の関連性を達成できるため、太郎の推薦人が（このコンテキストにおいては）次郎であったという事実を表すと解釈される。次例も同様である。料亭での会食に連れて行かれた4歳児が、うな重と会席料理を頼んだとしよう。うな重と会席料理自体は何の変哲もないもので、特に驚くべきことはなくとも、次のように言うことは自然である。

<sup>13</sup> 山田伸武氏の例（p.c.）を参考にした。

◆30 [氏家]（メモ）そもそも「因果的力を持つ」って「原因になる」ということのような気がする。

[山泉] ですね。→註に短くまとめてこの節削除？

◆31 [氏家]（メモ）語彙的な特性として関係性を表す名詞というものがあるという想定？

[山泉] 非飽和名詞の多くはそうなります。

(36) 4歳の坊やの注文料理が、人々を驚かせた。(西山佑司、p.c.)

この場合、下線部は、4歳の坊や RF に含まれる関係性《注文料理：うな重、会席料理》に対応するものの、「驚かせた」の原因を表すガ格項であるため、人々が驚くことを引き起こした原因と解釈されるべく、彼の注文料理が（このコンテキストにおいては）うな重と会席料理だったという事実を表す。このように、確かに関係性を表す名詞を主要部とした CPNP の存在は認められる。しかし、関係性を表す名詞を主要部としたものには、純粋な CPNP かどうか判断が難しいものがある。次の例を検討しよう。

(37) a. K テニススクールは、校長のおかげで生徒が殺到した。

b. K テニススクールは、大坂なおみという校長のおかげで生徒が殺到した◆<sup>32</sup>。

c. [K テニススクールの校長は大坂なおみである] ということのおかげで生徒が殺到した。

(以上3つ、西山佑司、p.c.)

(37)a の下線部は、CPNP だろうか。校長が有名テニス選手の大坂なおみであるとしたら、下線部は c の[]内に表された事実を表すと考えてよいのだろうか。筆者はそうではないと考える。下線部は、単純に K テニススクール RF の関係性《校長》のリンク先の RF に対応する。その根拠は、b のように、「校長」をリンク先の RF に直接対応する「大坂なおみ」に置き換えられることである。a の「校長」のリンク先はこのコンテキストでは大坂なおみ RF であるため、それを理解している聞き手は、校長は（有名テニス選手の）大坂なおみであるという想定を想起して、発話の関連性を高める。しかし、それは発話の明示的なレベル（表意）における理解ではなく、非明示的なレベルの理解（推意や含意）であって、a の「校長」が校長が大坂なおみであるという事実を表すのではない◆<sup>33</sup>。

次例も同様である。(38)a には、2つの解釈がある。父親が直接的に進次郎の出世を助けたという解釈と、父親は直接働きかけはしなかったものの、親の七光りで出世したという解釈である。後者の解釈は、b のようにパラフレーズできるため、「父親」が CPNP のようにも思える。

◆<sup>32</sup> [山泉] K テニススクールは、大阪なおみのおかげで生徒が殺到した。(他と合わせるために改変)

◆<sup>33</sup> [氏家] (ただの感想) 筋は通っているが、どれほど強い根拠になっているかは疑問。37a のように言った場合に CPNP だと考えて何か問題が生じるわけではないように思いました。どこかで線を引かないと面倒なのでここに引くことに決めたという感じ

「太郎は推薦人のおかげで落選した」も CPNP じゃないということですよ。[山泉 yes] 逆に「校長で人気が出た」だと CPNP? [山泉 yes]

[山泉] ※37b は他と合わせて例を変えました。

結局、事実として解釈する必要があるかどうかによるので、そういうことになります。

- (38) a. 父親が小泉進次郎の自民党での出世を助けた。<sup>14</sup>  
 b. 父親が小泉純一郎であることが小泉進次郎の自民党での出世を助けた。

しかしそのような解釈も、小泉進次郎の父親が元総理大臣の小泉純一郎であるという知識を参照した非明示的なレベルの理解によるもので、CPNPの議論において問題となっている明示的なレベルの理解ではないだろう。どちらの解釈でも、「父親」を「小泉純一郎」に置き換えることが可能であり、いずれの解釈の場合も「父親」は単純に、小泉進次郎 RF の関係性《父親》のリンク先の RF に対応し、そして、「助ける」の解釈には直接的なものも、間接的なものもあると筆者は考える。

では、関係性を表す名詞を主要部とした CPNP の確かな例として提示した(35)(36)についても、同様に非明示的なレベルの理解と考えることはできるかという、それには無理がある。まず、これらの場合は、値を直接表す名詞句に置き換えることができない。「推薦人」を「次郎」に置き換えると著しく容認度が下がる。

(35)' ?太郎は次郎で落選した。

「注文料理」を「うな重と会席料理」に置き換えると、うな重と会席料理自体が驚くべきものであったという意味になってしまう。

(36)' #うな重と会席料理が、人々を驚かせた。

このことは、これらの例が、(37)(38)とは異質なものであることを示唆する。そもそも(36)では述語「驚かせた」の意味に因果関係が含まれ、その原因項を問題の名詞句が担っているし、(35)では、「落選した」の原因を明示する「で」に問題の名詞句がマークされている。述語の表す因果関係も、原因の「で」がマークする名詞句が原因を表すということも明示的意味に含まれる。したがって、これらの名詞句は表意のレベルで事実を表す CPNP と考えるべきである。

なお、(35)'が、次郎が太郎の推薦人であるという事実で太郎は落選した、という意味に受け取ることができるとしたら、その場合の「次郎」は CPNP ではない。そのような理解は、次郎 RF (ID a) に入っている〈a が太郎を推薦した〉のような内容特徴が呼び出されることで可能になっていて、それゆえに非明示的な理解と言える。そのように値自体に置き換えた場合に潜伏命題文と同様の理解をすることは、値が RF に対応しない特質値の場合にはさらに難しい。

(39) ??太郎は 60 歳で落選した。

<sup>14</sup> 言うまでもないことだが、これは例文であって、このようなことを筆者が事実として主張しているわけではない。



(40) Cf. 太郎は年齢で落選した。

なぜ難しいかというと、「60 歳」は RF に対応せず、そのため、上の〈a が太郎を推薦した〉のような呼び出す内容特徴が見いだせないためだと考えられる。

#### 4.5. 潜伏命題名詞句と節によるパラフレーズの解釈可能性の違い

潜伏疑問名詞句とそれをパラフレーズしたものには、解釈可能性の違いがあることが知られている。例えば、(41)をパラフレーズした(42)は、ジョンがスミスを殺した者を同定したという(41)の解釈に加えて、ジョンはスミス殺しについて全く知らないが、“the murderer of Smith”で指示される者について、何らかの重要な事実を発見したという読みも可能である (Heim 1979: 53)。

(41) John found out the murderer of Smith.

(42) John found out who the murderer of Smith was.

この違いは、RFT では、(41)のような潜伏疑問名詞句の場合には、それに対応する(i)RF の ID か(ii)特質値か(iii)関係性のリンク先の RF の ID を定めたという発見だけを表せるのに対して、間接疑問節にパラフレーズした場合には、“the murderer of Smith”に対応する RF の内容特徴の発見も表せると捉えられる。このような違いは、CPNP の場合とそれを節でパラフレーズした場合には見られないようである。CPNP においては、上の(i)(ii)(iii)が既に埋まっているからである。

しかし、CPNP と節によるパラフレーズの間に、解釈可能性の違いがないわけではない。まず、CPNP は、それが表す事実の位置付けが潜伏命題文の述語と同じものでなければならないようである。たとえば、節でパラフレーズした次の文は、脱出を妨げた時点ではドアの幅が 85cm から変わっていた場合—たとえば、あるメーカーが作った 85cm のドアに不具合が見つかり、補修した結果、妨げた時点では 60cm だった場合—にも使える◆<sup>34</sup>。

(12)' そのドアの幅が 85cm だったことが子供達の部屋からの脱出を妨げた。

このような解釈は、CPNP の(12)では不可能である。つまり、CPNP を事実として解釈する際に補われる必要がある事実の成立時は、述語と同じものになるようである。また、可能性などのモダリティ要素を付け足して CPNP を解釈することもできない (田中太一, p.c.)。たとえば、(43)のこと

---

◆<sup>34</sup> [氏家] 理解に自信が持てません (言えない気がする)

[山泉] 内山さんもわからなかったの、直した。田中さんの想像力に誰もついていけないので外した方がよいかも。

時制をずらして、「そのドアの幅が元々 85cm だったことが子供達の部屋からの脱出を結果的に妨げ(ることになるとは誰も予期しなかつた)」はどうでしょうか。

を CPNP を使って(44)のように言うことはできない<sup>◆35</sup>。

(43) そのプールの深さが 1m かもしれないことが私が飛び込むのをためらわせた。

(44) そのプールの深さが私が飛び込むのをためらわせた。

述語の強制によって RF の中の特質・値・関係性・リンク先から事実を形成する際には、最小限の補充が行われるようである。RFT の立場からは、特質・値・関係性・リンク先という、元々時制やモダリティを含まないものから強制によって得られた事実であるからだと考えられる。

#### 4.6. まとめ：潜伏命題名詞句のスキーマと曖昧な例の分析

CPNP は、言語使用者が初めて接した場合でも、RFT が想定するような概念構造や語用論能力があれば適切に解釈可能であろう。そして、そのような名詞句の解釈が言語使用において繰り返されるのであれば、この解釈パターンはおおよそ以下の特徴を持つスキーマとして定着していると考えられる。

(45) 統語：NP<sub>1</sub>——意味：事実《RF の特質<sub>1</sub>値・関係性<sub>1</sub>のリンク先の RF の ID が a であること》（添字<sub>1</sub>は NP の主要部の語彙的意味による対応を表す）

非言語的コンテキスト：RF の特質値<sub>1</sub>または関係性のリンク先の RF の ID<sub>1</sub>が問題の位置付けにおいて定まっている。（i.e., [特質<sub>1</sub>：a] または《関係性<sub>1</sub>：(ID) a》）

言語的コンテキスト：形式的には述語は NP<sub>1</sub>を項に取るが、意味的には特質<sub>1</sub>・関係性<sub>1</sub>の値がどうなっているかを問題にしていない。その述語は、NP<sub>1</sub>に対応する項が因果的な力を及ぼす状況を表す。

このスキーマは、名詞句の解釈パターンであるけれども、非言語的コンテキストの特徴を必要不可欠な部分として含む。このことは、次に立ち戻る潜伏命題文と潜伏疑問文で曖昧な例（(8)）を考えると、明らかである。

この解釈パターン——特質・関係性の表現を、その値が定まっているコンテキストにおいて、事実《特質<sub>1</sub>・関係性<sub>1</sub>を持つ対象のその特質/関係性の値はその値だ》と解釈するパターン——は既存の RFT の道具立てで十分特徴付けられる。したがって、CPNP という名詞句のカテゴリーを新たに理論に導入する必要はない。もっとも、このパターンで解釈される名詞句を「潜伏命題名詞句」（あるいは「潜伏事実名詞句」）と呼ぶことは、特にこのスキーマが定着・慣習化している場合、有意義な一般化である。

◆35 [氏家] ここの理解に自信がありません。

[山泉] ここの。田中さんの想像力に誰もついていけないので外した方がよいかも。「田中太一 p.c.」が抜けていた。

CPNP の説明に限らず、一般に、変項名詞句という N-意味理論の概念も RFT には必要ない。2 つの理論を比較するために、N-意味理論が変項名詞句と呼んでいるものという意味で「変項名詞句」という語を用いているが、RFT の枠内における現象の記述においては、この概念は不要で、異なる分析がなされる（例えば、N-意味理論で変項名詞句とされている倒置指定文の主語名詞句を、Yamaizumi 2019、山泉 2020b が RFT の枠組みで分析している）。

RFT では、倒置指定文（山泉 2020b）と同様、CPNP も第一義的には動的な<sup>◆36</sup>解釈パターンとして特徴付けられる。これは、どちらも静的な言語知識として特徴付ける N-意味理論とは対照的である。RFT の動的な観点は、通常の言語使用を分析する場合だけでなく、言語の動態を捉える際にも有効である。CPNP を意味論のレベルにおいて静的な言語知識として捉えた場合、CPNP が容認されなかった言語で広く使われるようになるというあり得るプロセスを捉えることはできない。RFT の分析は、そのようなプロセスを、スキーマが定着した話者の増加として捉えることができる。

潜伏命題文と潜伏疑問文で曖昧とされた(8)（わたくしは、花子の年齢が気になる。）は、RFT では次のように分析できる。両者の違いは、「花子の年齢」に対応する特質の値の違いに対応し、特質 [年齢: □] の値が問題の位置付けにおいて定まっている場合にはこの名詞句は CPNP となる。一方、その値が定まっていない場合には潜伏疑問文の読みとなる。

(46) (潜伏疑問文では x、潜伏命題文では a)

「花子の年齢」ONT 値 / @聞き手 > 話し手 / CNT 花子 b [年齢: x/a] ; <話し手は花子 [年齢: x/a] の x/a の値が気になる>

「気になる」が表す事態の経験者を表す「わたくし」が花子の年齢を知っていれば潜伏命題文の読みにしかならず、知らない場合は潜伏疑問文の読みにしかならないことがこの分析を裏付ける。潜伏命題文の場合には、前述の通り値の変異の可能性が問題となっていないが、「気になる」は変異の可能性を問題とすることもできるため、両方の読みが可能になるのである。

なお、N-意味理論ではこの違いは意味論的曖昧性とされているが、RFT ではそうならない。[年齢: x] であるか [年齢: a] であるかは、この文の言語表現がコード化する意味（概念構造へのインタフェース制約）の違いによるものではないからである。「気になる」の概念構造への制約としては、x か a かは未決定で、「気になる」の意味が、潜伏疑問の場合は知りたくなるということ、潜伏命題の場合は差し障りを感じるということになるという違いは、[年齢: x] のときの気になり方と [年齢: a] のときの気になり方の違いから導かれるだろう。

## 5. 特質・関係性の値の明示可能性と値が独立した RF に対応するか否かの相関

RFT の分析では、CPNP に ~~2 種類ある~~ 2 種類に分けられることになる。名詞句の主要部が字

◆36 [氏家]「解釈パターン」なら「動的」で「意味論」なら「静的」ということでしょうか。

[山泉] ですね。N-意味理論は、基本的に静的な概念構造へのインタフェース制約なので。

義的には関係性（例「推薦人」）を表すものと特質を表すもの（例「年齢」）である。両者の間には、値が独立した RF に対応するかしないかという違いがあった。この区別は、理論内部においてしか正当化されないものではない。以下では、値を CPNP と共に明示できるかどうかということを検討して、この区別を正当化する。これは、N-意味理論では指摘されていなかった現象であり、これを説明することで、N-意味理論のさらに先を行くことを目指す。

西山（2013）では指摘されていないことだが、以下のように CPNP はその値の表現と共起できるものがある。値の表現と CPNP をつなぐ表現は「の」「である」「という」など様々だが、本稿では深入りしない。

(12)' 85 cm {の/である/という} ドアの幅が子供達の部屋からの脱出を妨げた。

(11)' a. その箱は、入れた荷物の 30 kg という重さのために底が抜けた。

b. 花子は、60 歳という年齢のせいで、就職がなかなかできないようだ。

c. 東京―熱海間のあれほどの距離が太郎を疲れさせた。

d. 社長は 3m というそのプールの深さが気に入った。

e. 太郎は 100 万円というその会社の初任給に驚いた。

g. 太郎は 5m というその部屋の天井の高さに驚いた。

これらには、明示された値が独立した RF に対応しないという共通性がある。一方、値が独立した RF である関係性の CPNP の場合は、値を明示すると容認度が明らかに下がる<sup>◆37</sup>。

(35)' ?太郎は次郎という推薦人で落選した。

(36)' ?うな重と会席料理という 4 歳の坊やの注文料理が、人々を驚かせた。

CPNP はこのような違いから 2 種類に分けられ、その違いが、値が独立した RF に対応しない特質と対応する関係性という概念で捉えられるため、特質の CPNP と関係性の CPNP に CPNP を二分することが正当化される。このような区別をする道具立ては、N-意味理論にはないようで、この点でも RFT の分析の方が優れている。

## 5.1. 他の構文における値の明示可能性と値が独立した RF に対応するか否かの相関

値が独立した RF に対応するか否かという、RFT のもたらす視点は、CPNP 以外の名詞句、特に N-意味理論が変項名詞句としているものにも、新たな光を投げかける。

◆37 [氏家] これはそれほどクリアな違いでしょうか。「太郎は次郎という推薦人で人気を得た」ならかなり良くなる（「そもそも太郎は推薦人で落選した」がギリギリ OK のライン）

36' に関してはかなり自然に感じる。もう少しデータが必要だと思いました。

[山泉]「太郎は次郎という推薦人で人気を得た。」にします。

倒置指定文も変項名詞句が関わると N-意味理論で言われるものである。倒置指定文を名詞修飾節にした場合、上と類似の現象が見られる。(47)(48)のように倒置指定文を装定の形にして主語名詞句を述語名詞句することは難しい(西川 2013: 100)、あるいは不可能だ(西山 2013: 113)と N-意味理論で言われている(岸本 2012: 54 にも同様の記述が見られる)。しかし、「一般に」と言われていることも、(49)(50)のように値が独立した RF に対応しない場合にはあてはまらない。

(47) 犯人は太郎である。→ ??太郎である犯人。

(48) 大統領はオバマである。→ ??オバマである大統領

(49) 機材の値段は 100 万円である。→ 100 万円である機材の値段

(50) 東京―新大阪間の所要時間は 2 分半である。→ 2 分半である東京―新大阪間の所要時間

倒置指定文についても、値が独立した RF か否かが関与的な現象が観察されと言える。

次のペアの容認度の差も、固有名詞の方が独立した RF に対応させやすいことから説明できる。

(51)a は、「太郎」が独立した RF に対応するため、上の例と同様容認度が低い。それに対して b は、「花子の兄」を独立した RF ではなく太郎 RF の内容特徴《関係性：リンク先》を表すと解釈しやすく、その場合、ここで問題としている独立 RF によって値を定めることが行われな  
い。そのため a のような問題はないということである。

(51) a. ??太郎である花子の兄 b. 花子の兄である太郎

一方、「兄」を独立した RF に対応しない「年齢」に変えると、容認度が逆になる。

(52) a. 60 歳である花子の年齢 b. ??花子の年齢である 60 歳

この点でも特質と関係性は対照的である。

潜伏疑問叙述文(西山 2013: 13 章)で値を明示してみると、値が独立した RF である場合((53))にだけ容認できなくなる。主語名詞句に(47)(48)のような独立した RF である値を定める倒置指定文が埋め込まれているからと考えられる。

(53) \*白鵬である今場所の優勝者は明らかだ。<sup>15</sup>

(54) 巨人の 4 連勝という今度の日本シリーズの結果はやる前から明らかだ。

---

<sup>15</sup> この文の「白鵬である」を「白鵬という」にしても容認度が上がらないのは、この文は述語が「明らかだ」の潜伏疑問叙述文で、主語名詞句が指示的名詞句になり得ないからである。

~~潜伏疑問文についても同様で、値を明示した場合に倒置指定文が埋め込まれることになるため、そこで定められる値が独立した RF である場合は、容認できなくなる。~~

~~(55) \*太郎はバッハである花子の好きな作曲家に関心がある。（西山 2003: 97 から改変）~~

~~値が独立した RF でないと、(56)のように値を明示することに問題はない。~~

~~(56) 太郎は 69 連勝という双葉山の連勝記録に関心がある◆<sup>38</sup>。~~

◆38 [氏家] これは潜伏疑問の解釈になりますか？ 太郎が連勝記録が 69 と知っている読みになりませんか？

[山泉] 知らないうちに話が変わってしまった。

(55)は、潜伏疑問の読みはもちろん、指示的名詞句の読みも不可能という例で、後者の読みの場合、値が独立した RF でないなら、明示できるということを(56)は示そうとした？→書き直しました。

潜伏疑問文については話が少々複雑である。潜伏疑問名詞句の部分が独立した RF に対応するかしないか、その値を明示するかしないかで、4 通りを検討する必要がある。次例は、独立 RF に対応し、値を明示しない例である。

(i) 太郎は花子の好きな作曲家に関心がある。（西山 2003: 97。独立 RF・値非明示）

しかも、この例は曖昧で、「花子の好きな作曲家」を潜伏疑問名詞句とする読み（「花子の好きな作曲家」⇨「誰が花子の好きな作曲家か」）だけでなく、「花子の好きな作曲家」で例えばバッハを指示するような、指示的名詞句とする読みも可能である。値を明示すると、潜伏疑問文の読みはできなくなるが、指示的名詞句の読みは、値の明示の仕方による。「という」を使うと可能だが、「である」を使うと不可能である。

(ii) 太郎はバッハ {である／という} 花子の好きな作曲家に関心がある。

潜伏疑問の解釈：\*である／\*という

指示的名詞句の解釈：\*である／ok という

独立した RF に対応しない場合、値を明示しないと、潜伏疑問の解釈（⇨太郎は花子は何歳かに関心がある）だけが可能である。

(iii) 太郎は花子の年齢に関心がある。

値を明示すると、潜伏疑問の解釈は「という」では不可能だが、「である」の場合に少し不自然だがかろうじて可能である。したがって、疑問埋め込み述語の目的語においても特質の値を明示することが禁止されているわけではない。

なお、指示的名詞句の解釈はどちらの場合もかなり不自然である。

(iii) 太郎は 60 歳 {である／という} 花子の年齢に関心がある。

潜伏疑問の解釈：?である／\*という

指示的名詞句の解釈：??である／??という

~~したがって、疑問埋め込み述語の目的語においても特質の値を明示することが禁止されているわけではない。(55)は、「花子の好きな作曲家」を潜伏疑問名詞句とする読み（「花子の好きな作曲家」≡「誰が花子の好きな作曲家か」）だけでなく、指示的名詞句とする読みも不可能である。~~

46

(57) (58) は、潜伏疑問文の述語の種類による違いもないことを示そうとしたものである。

(57) #太郎は花子という犯人を {a. わざわざたずねた／b. 知っている／c. 推測した}。

(58) 太郎は 25℃というプールの水温を {a. わざわざたずねた／b. 知っている／c. 推測した}。

述語が疑問埋め込み述語 (a) でも、叙実述語 (b) でも、resolutive 述語 (c、註 6 参照) でも、値が独立した RF に対応する場合 ((57)) は、値を明示すると同様のことが起こり、意味が大きく変わってしまう。

変項名詞句が関わりと N-意味理論でいわれている絶対存在文においても、値を明示すると変項の値が独立した RF である場合 ((59)) は容認度が大きく下がる一方で、値が独立した RF でない場合 ((60)) にはそのようなことはない。

(59) ??太郎である 100m を 8 秒で走れる人が存在する。<sup>17</sup>

(60) 69 連勝という相撲の連勝記録が存在する。

100m を 8 秒で走れる人が太郎であることは、発話の関連性を明らかに高めると考えられる。それにも関わらずこれらを追加すると発話の容認度が下がることは説明を要する。これまで観察してきた他の文についても同様である。RFT の観点からその理由を次節で考察する。

## 5.2. なぜ独立 RF の値は明示できないのか

独立 RF の値を明示できないことの説明として、ここでは、RF の ID を定めることは文の中心的な、いわゆる新情報として表現する必要がある<sup>◆39</sup> という制約を提案したい。一方、独立した RF に対応しない特質値に関してそのような制約はないということである ((11)/(12)')。この制約はいかにして正当化されるのか。言語は、OIC において聞き手の心的状態を操作することを固有機能とし、

<sup>16</sup> 指示的名詞句の読み自体が不可能であるわけではなく、「である」を「という」にすることで可能になる。

<sup>17</sup> 「太郎である」を「太郎という」にすると容認度が上がるが、その場合、主語名詞句が指示的名詞句となり、もはや変項名詞句ではなくなるため、絶対存在文とはならない。

◆39 [氏家] ちなみに「(47) 太郎である犯人」はダメで「太郎という犯人」は OK という対比はこの仮説で説明できますか？

[山泉] 「という」の意味をちゃんと考えないといけません、「名前+という N」は、N の RF の ID を定めるのではなく、内容特徴（名前？）を足すから ok なんだと思います。

話し手は言語表現の使用によって聞き手に自らの RF に対する様々な操作を促す（2.1 節）。その中で RF の ID を明示的に定めることは文の中心的認知効果であるのが自然である。なぜなら、ID が定まって初めて RF は世界と関係を持ち、それへの情報が直接的な関連性を持つようになるからである◆40。そのため ID を定める情報は最優先され、その表現が前景化された形で表されるという情報構造が慣習化していると考えられる。しかし、「～という」「～である」という形の名詞修飾部は、少なくとも上の例においては新情報と慣習的に結びつく部分ではない。そのため (55) (59)(53)(47)(48) では、ID の値を定めるという RF の変化が発話の中心的認知効果をもたらすとは受け取られず、容認度が低いのではないか。一方、次例下線部のように ID が定項の RF の内容特徴を表す場合は ID を定めているわけではないため、問題ない。

(55)' 太郎は花子の好きな作曲家であるバッハに関心がある。

また、(61)(62)が示すように、ID が null 値であるか否かも文の中心的新情報として表されなければならないようだ。この制約がある理由も同様と考えられる。つまり、ID が null 値かどうかは、RF が世界と関係を持ち得ないかどうかに直結し、null 値であるとその RF への情報は直接的な関連性を持ち得ない。そのため、ID が null 値かどうかの情報も最優先され、その表現は前景化されることが慣習化されているのではないだろうか。<sup>18</sup>◆41

(61) a. \*存在しない人が 100m を 2 秒で走れる。

b. 100m を 2 秒で走れる人は存在しない。

(62) a. \*存在する人が 50m を 6 秒未満で走れる。

b. 50m を 6 秒未満で走れる人が存在する。

## 6. 結論

N-意味理論は、潜伏命題文という興味深い現象に注目したが、CPNP を値が埋まった変項名詞句とする分析は多くの疑問を残すものであった。RFT は、CPNP は独立した RF に対応せず、定まった値を持つ特質に対応し、因果関係を表す述語の強制によって事実を表すと分析する。そうすることで N-意味理論の分析にあったような問題は解消した。また、値が独立した RF に対応するか否かという観点は、N-意味理論が変項名詞句の概念によって分析していた他の多くの構文についても関

◆40 [氏家] この箇所は面白いと思いました

<sup>18</sup> 英語の there is だけの関係節は、この説の反例となり得る◆41 が、かなり用法が限られているようでもある。その制約を本文で述べた観点から検討していく必要がある。

◆41 [氏家] No one can～ も反例になるのではないのでしょうか。新情報の表現の仕方の慣習が言語によって異なると考えれば、問題にならないと思いますが。

[山泉] 反例になります。No one や nothing は、日本語に直接対応するものがなく、かなり特殊なことをやっていると思います。ID φを導入することを述語に頼らず、NP だけでやっている。



与的であり、新たな言語事実を説明できる。以上の議論によって、RFT の N-意味理論に対するいくつかの点での優位性を示した。

なお、N-意味理論は「非標準的潜伏疑問文」と、それと並行的な「非標準的潜伏命題文」というものがあるとしている(西山 2013)。これについては、「非標準的潜伏疑問文」についての山泉(2021)の議論が正しければ、検討する必要はない◆42。「非標準的潜伏疑問文」というカテゴリーは、N-意味理論の標準的潜伏疑問文の特徴付け(三位一体説、山泉 2019)があてはまらないものを分類するためのものである。しかし、西山(2013)が挙げている非標準的潜伏疑問文の特徴付けは、そこで挙げられている例さえこのカテゴリーに入ることを保証できない不十分なものである。さらに、三位一体説は、体系的な反例があり、一般性を欠く(本稿 3.2 の 4 つ目の疑問でその一端を紹介した)。そのため、RFT のように三位一体説を前提としなければ、非標準的潜伏疑問文というカテゴリーの必要性は認められない。以上の議論が正しければ、これと並行的に、標準的潜伏命題文と非標準的潜伏命題文の区別もする必要がない。“非標準的”潜伏命題名詞句は、本論文で扱った“標準的”潜伏命題名詞句と同様に RFT で分析できるということである。

\*謝辞 本稿は、基礎言語学研究会 論文草稿合評会で議論した草稿を書き改めたものである。そこでコメントをくださった方々、特に田中太一氏、西山佑司氏に深く感謝する。

## 参考文献

- Burke, Luke (1952) On the tunnel effect. *Quarterly Journal of Experimental Psychology* 4: 121–138.
- Castroviejo-Miró, Elena (2006) *Wh-exclamatives in Catalan*. Ph.D. dissertation, Universitat de Barcelona.
- Castroviejo-Miró, Elena, and Schwager, Magdalena. (2008) Amazing DPs. In: Tova Friedman and Satoshi Ito (eds.), *Proceedings of the 18th Semantics and Linguistic Theory Conference*, 176–193.
- Culicover, Peter W., and Jackendoff, Ray (2005) *Simpler syntax*. Oxford: OUP. Kindle edition.
- Ginzburg, Jonathan, and Ivan Sag (2001) *Interrogative investigations*. Stanford, CA: CSLI.
- Heim, Irene. 1979. Concealed questions. In R. Bäuerle; U. Egli; A.v. Stechow. (eds.), *Semantics from different points of view*. Berlin: Springer Verlag, pp. 51–60.
- Jackendoff, Ray (1992) *Languages of the mind*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Pustejovsky, James (1995) *The generative lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Yamaizumi, Minoru (2019) A cognitive-pragmatic account of specificational sentences. Poster presentation at the 15th International Cognitive Linguistics Conference. Kwansei Gakuin University, 8 August 2019. <https://app.box.com/s/509mijaa03vti4judljyza0jc8e1k02w>
- 天野みどり・三宅知宏・大木一夫 (2019) 「展望 1」『日本語文法』19(1): 90–97.

---

◆42 [氏家] この論点は結論ではないので結論の節ではなく別のところに書く方が自然ではないでしょうか。  
[山泉] まとめ：潜伏命題名詞句のスキーマと曖昧な例の分析  
にこの段落を入れる。

- 今井邦彦・西山佑司（2012）『ことばの意味とはなんだろう』東京：岩波書店。
- 上山あゆみ（2015）『統語意味論』名古屋：名古屋大学出版会。
- 梶浦恭平（2013）「『よい』の曖昧性とアドホック概念構築」西山 2013: 471–495.
- 岸本秀樹（2012）「日本語コピュラ文の意味と構造」影山太郎（編）『属性叙述の世界』39–67. 東京：くろしお出版。
- ターン，トーマス（中山茂訳）（1970/1971）『科学革命の構造』東京：みすず書房。
- 熊本千明（2018）「潜伏感嘆文の意味特性について」『佐賀大学全学教育機構紀要』6: 43–61.
- ジャッケンドフ，レイ（郡司隆男訳）（2002/2006）『言語の基盤』東京：岩波書店。
- ジャッケンドフ，レイ（大堀壽夫他訳）（2012/2019）『思考と意味の取扱いガイド』東京：岩波書店。
- スコット＝フィリップス，トム（畔上耕介他訳）（2015/2021）『なぜヒトだけが言葉話せるのか』東京：東京大学出版会。
- 鈴木生郎・秋葉剛史・谷川卓・倉田剛（2014）『ワードマップ 現代形而上学』東京：新曜社。
- スペルベル，ダン・ウィルソン，ディアドリ（内田聖二他訳）（1995/1999）『関連性理論』（第2版）東京：研究社。
- 戸田山和久（2004）「心は（どんな）コンピュータなのか」信原幸弘（編）『ロボット篇』，シリーズ心の哲学Ⅱ. 27–84. 東京：勁草書房。
- 西川賢哉（2013）「『NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>』タイプD'とタイプF'」西山 2013: 83–101.
- 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論』東京：ひつじ書房。
- 西山佑司（2007）「名詞句の意味機能について」『日本語文法』7(2): 5–19.
- 西山佑司 編著（2013）『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』東京：ひつじ書房。
- 西山佑司（2019a）「意味の科学から言語理論への3つの問題提起」第108回慶應意味論・語用論研究会. 慶應義塾大学、2019年4月6日. 発表資料.
- 西山佑司（2019b）「チョムスキー理論と哲学：方法論的自然主義と内在主義」慶應言語学コロキウム「生成文法理論：その総括と課題—訳書『チョムスキーの言語理論』（2019）を踏まえて」ハンドアウト.
- (<http://www.icl.keio.ac.jp/colo/2019/11/25/handouts092829.pdf>)
- 西山佑司（2020）「二つのタイプのウナギ文」『日本語文法』20(1): 3–19.
- 西山佑司・西川賢哉（2018）「指定文の分析において「中核名詞句」なる概念はどこまで妥当か」『言語研究』154: 177–192.
- 西山佑司・峯島宏次（2006）「叙述名詞句と語用論的解釈」飯田隆（編）『西洋精神史における言語と言語観—継承と創造』21–50. 東京：慶應義塾大学言語文化研究所。
- フォコニエ，ジル（坂原茂他訳）（1984/1996）『新版 メンタル・スペース』白水社。
- 峯島宏次（2013）「変項名詞句の階層」西山 2013: 407–430.
- ミリカン，ルース・ギャレット（信原幸弘訳）（2002/2004）『意味と目的の世界』東京：勁草書房。
- 山泉実（2019）「名詞句の“自由拡充”が抱える問題とその根源」日本科学哲学会第52回大会口

頭発表. 慶應義塾大学、2019 年 11 月 10 日.

<https://app.box.com/s/fxwmjdi4okno2rfvb4dripwe5ao8u1dl>

山泉実 (2020a) 「「並列名詞」とそれが主要部になる名詞句：両者の意味の関係と語彙的特徴」形態論・レキシコンフォーラム 2020 口頭発表. オンライン, 2020 年 9 月 12 日.

<https://app.box.com/s/94vrzljioiek6seh4mj30bb0lq4sfmxf>

山泉実 (2020b) 「指示参照ファイル理論序説」『日本語・日本文化研究』30: 1-28. 大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻.

山泉実 (2020c) 「認知的視座からの意味論と形而上学」『日本語・日本文化研究』30: 29-52. 大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻.

山泉実 (2021) 「潜伏疑問名詞句再考」『言語文化研究』47: 101-121. 大阪大学大学院言語文化研究科.

### 【要旨】

名詞句意味論・語用論の現行パラダイム N-意味理論に代わる新しい理論として指示参照ファイル理論を提案した。N-意味理論は、「ドアの幅が脱出を妨げた」の「ドアの幅」のような名詞句を潜伏命題名詞句と呼び、その変項が充足された命題関数（例えば、[N はドアの幅だ]）を表すと主張する。指示参照ファイル理論を概説した上で、この説明の問題点を指摘した。そして、潜伏命題名詞句は、指示参照ファイルの特質・関係性で値が定まったもの（例ドア [幅: 30cm]）に対応し、それが因果作用を表す述語の原因項になっているため、強制によって、命題ではなく因果的力を持つ事実を表すと特徴付けた。潜伏命題名詞句は、30cm のような値の表現と共起することが可能なものがある。この可能性は名詞句が独立したファイルに対応しないことと相関していることを示した。最後に、名詞句が独立したファイルに対応する場合に、なぜその値を明示することができないのかを議論した。

$$\left[ \begin{array}{c} [\text{TYPE:STAR}]_5 \\ \text{DEF}_3 \\ [\text{Prop LITTLE}]_4 \\ \text{Object} \end{array} \right]_2$$

[Object [TYPE:STAR]<sub>i</sub>, DEF<sub>j</sub>]<sub>K</sub>

例えば、ジャッケンドフ（2002/2006: 5）に従うと、名詞句 **the star** の概念構造への制約は上のようになる。*i, j, K* はそれぞれ、*star*、*the*、名詞句全体との対応を表す。RFT の言葉で言うと、**K** は **RF** に対応することを表す（大文字は **RF** への対応を表すとする）。[TYPE:STAR]は **K IS STAR** という内容特徴が **RF** にあるという制約（ただし、*star* の詳しい意味については未指定）、DEF は対応する **RF** が聞き手の心において同定可能であるという制約を表す。